



PLIJ の未来人材育成

ANNUAL REPORT 2026



一般社団法人
学びのイノベーション・プラットフォーム
Platform for Learning Innovation - Japan (PLIJ)

Contents

理事長メッセージ 3

Section 1 特別インタビュー

藤井 輝夫（ 国立大学法人東京大学 総長 ） 4

Section 2 創立 5 年を振り返って 7

Section 3 PLIJ 活動

1. STEAM コンテンツ 10

2. メンターマッチング 14

3. 産学官公教の交流 16

4. STEAM・探究グランプリ表彰 24

Section 4 2025 年度グランプリ受賞者プロフィール 26

Section 5 法人概要 39

理事長メッセージ

（ 一社 ） 学びのイノベーションプラットフォーム (PLIJ) のアニュアルレポートは、2 年度目になります。巻頭を飾っていただきました藤井輝夫東京大学総長インタビューは、現下の教育について示唆に富む充実した内容になっています。また、創設 5 周年のタイミングにあたりますので、この 5 年間を振り返る特設コーナーも設けています。

PLIJ の 4 つの活動

- 1

STEAM 教育コンテンツ

2023 年 4 月から運用開始した PLIJ STEAM Learning Community は、会員様を中心に多様なステークホルダーから提供いただいた STEAM 教育に活用できる動画・画像・ドキュメント等を横断的に検索、閲覧することが可能です。現在約 1200 件を超えるコンテンツが収納されていますが、質と量両面での進化めざしつつ、学校での使い方のモデルの提示にも取り組んでいます。
<https://community.plij.or.jp>
- 2

メンター・マッチング

生徒や子どもたちに現地・現物・人物に接することができる本物体験の機会と STEAM 探究の学びの支援を行うため、メンターの存在が欠かせません。学校からの要望やリソースを保有する社会の側（企業や大学など）からの提案をもとに、マッチングを PLIJ が行います。工場 / 研究室見学、技術者 / 研究者との対話、出前授業、講演会等について、メンターには多様な形態があります。
- 3

産学官公教の交流

探究型、教科横断型の教育である STEAM 教育の実践に向けて、取り組みに活用できる情報や全国各地のグッドプラクティス等を共有し、人的ネットワークを育てる機会を提供します。STEAM 人材育成研究会、女性活躍イベント、サマーキャンプに加えて、2025 年度には中高生のための産業探訪シリーズを開始しました。
- 4

PLIJ STEAM・探究グランプリ

2024 年度を初年度として表彰制度を樹立しました。社会総出と連携をキーワードに顕著な実績を残された組織の活動を見る化し、社会的気運を盛り上げて参ります。2026 年 1 月の表彰では、グランプリ 11 件、特別賞 2 件が受賞されました。その活動ぶりについては、順次公開いたします。



2025 年度の活動を振り返りますと PLIJ の 4 つの活動それぞれに進展を見えています。ぜひ本文の各パートをご覧ください。2025 年度に新たにいくつかのことにチャレンジいたしました。その一つは、2024 年度に 3 回にわたって開催しました半導体セミナーの経験をもとに「産業探訪シリーズ」として、産業分野のリアルを中高生にお届けすべく、「メタラジー（7 月）」及び「化学（12 月）」について実行できたこと、二つ目に地域での浸透を図るべく、「一日 PLIJ」を東北大学のご協力をいただいて仙台で開催し、今後各地で開催していく端緒となりました。2024 年度に続きまして、寄付をいただきました。事業拡大の中にあって、きわめて有効でありました。心よりお礼申し上げます。

この小冊子をお手に取っていただいた皆様方には、PLIJ の活動に一層ご関心を寄せていただくとともに、PLIJ が成長軌道に乗って産学官公教の意味ある存在となるようご指導いただければ幸甚でございます。

一般社団法人
学びのイノベーション・プラットフォーム
理事長

浦 嶋 将 年



人材育成の課題

【司会】まず最初に、現在の教育や人材育成を取り巻く環境との関連で、藤井総長の問題意識を共有いただければと思います。

【藤井】私は長年、これからの高等教育のあり方などについてアカデミアのみならず産業界の皆様とも議論してきました。特に博士人材の活躍については、2年前に立ち上がった「博士人材に関する産学協議会合」において、公立、私立の大学団体の代表者とともに、経団連の皆様と議論を重ね、最近報告書を公表しました。

これまでの様々な議論を通じて強く感じているのは、日本の教育システムはまだまだ時間的な多様性に乏しいということです。子どもによって学ぶ速度も違えば、伸びるタイミングも違います。しかし、日本の公教育は、学年ごとに定められた内容を足並みをそろえて学ぶ仕組みが中心です。

これは子どもの教育に限った話ではありません。社会に出てからも、キャリアの途中で新しい知識や技術を学ぶ必要性が急速に高まっています。現代はきわめて多くの変化が速いスピードで起こっています。特に AI やデジタル技術の進化によって仕事そのものが変わり続けている時代ですから、一度学んだ知識だけでその後の生涯を通じて社会で通用する、ということは少なくなってきました。

その意味では、大学も 20 歳前後の若者だけを教育する場ではなく、人生のさまざまなタイミングで人が戻って来られる場所にならなければいけないと思っています。ひいては、人生のさまざまな段階で柔軟に学び直しができる社会を作っていく必要があると感じています。近年は、リスキリングやリカレント教育という言葉も広がっていますが、本当に重要なのは「学びたい時に学べる社会」の実現でしょう。

また、学ぶ内容についても、単に知識をインプットするだけではなく、探究的な学びによって、自身で問いを立てる力を育てることが重要です。今まさに私たちを取り巻いている様々な問題のなかで明確な唯一の解が存在するものは、ほとんどありません。むしろ、自ら課題を発見し、他者と協働しながらその解決に向けた道筋を描き出す能力こそが求められています。

その意味で、STEAM 教育や探究的な学びは極めて重要です。自ら問いを立て、社会とのつながりの中で考え、学び続ける力がよりいっそう求められているのだと思います。

「変革期の人材育成：学びと社会を結び直す」

藤井輝夫東京大学 総長インタビュー



インタビューに応じられる藤井総長（2026 年 5 月）

学びと社会を結び直す

【司会】昨年夏の PLIJ サマーキャンプで藤井総長が語られた「学びを社会と結び直す」というキーワードが印象的でした。従来のように、学校の中だけで完結する学びではなく、社会との接点を持ちながら学ぶことの重要性を指摘されてました。

【藤井】「学びと社会を結び直す」というのは、私が以前から強調してきたテーマです。教室の中だけで学ぶのではなく、一度社会や現場に出て課題に触れ、また教室に戻って学びを深める。そうした行き来が必要だと思っています。学生が企業や自治体、海外の現場などで実際の課題に触れることで、自分が教室で得た学びの中で通用した部分や、足りなかった部分に初めて気づくことができます。その実感によって、学びはより深く、実践的なものになります。

ここで、2027 年秋の開学に向けて東京大学が開設準備を進めている新課程「UTokyo College of Design」について、少しご紹介させてください。この課程では、分野横断的な学び、グローバルな視点、そして実社会との接続を重視しています。秋入学で、全て英語で授業を行

い、日本だけでなく世界から学生を受け入れます。また最大 1 年間、大学外で活動することを必須としています。このように UTokyo College of Design は、これまでの東京大学にはなかった新しいユニークな学びの在り方を実現しようとする試みです。

ここで言う Design（デザイン）とは、単なる意匠ということではなく、社会のルールやサービス、さらには未来社会そのものを構想することです。これまでの 20 世紀型の社会では、企業が「良いもの」を大量に作って提供すれば、人々がそれを受け入れるというモデルが成立していました。しかし 21 世紀は違います。個人が何を求めているのかを観察し、その声を聞きながら商品やサービス、仕組みを設計していく必要があります。つまり、サプライサイドではなく、デマンドサイドを起点に社会を構想する時代です。デザインは、それを実現するための 1 つの専門性・能力であると受け止めています。この新しい教育課程では、学生たちが一つの専門に閉じるのではなく、異なる専門領域を横断しながら学ぶことを重視しています。実際、私たちを取り巻く課題は、もはや単一の専門分野だけで解決できるものではありません。だからこそ専門を超えて対話できる人材が必要で、その育成のための教育環境の整備が求められています。UTokyo College of Design は、こうした求めに応じた東京大学としての一つの答えです。学生自身がそれぞれの興味・関心に基づいて課題を設定し、その解決に必要な知識やスキルを従来の学問領域にとらわれずに学べる環境を用意しています。

「A」の重要性

【司会】本年 8 月恒例の PLIJ サマーキャンプでは、「STEAM の「A」を考える」をテーマにいたします。近年、理工系教育やデジタル教育の重要性が強調される一方で、哲学、歴史、芸術、文化といった領域の価値が改めて見直されつつあります。STEAM の「A」、すなわちアートやリベラルアーツについて、さらに深くお話を伺いたいと思います。

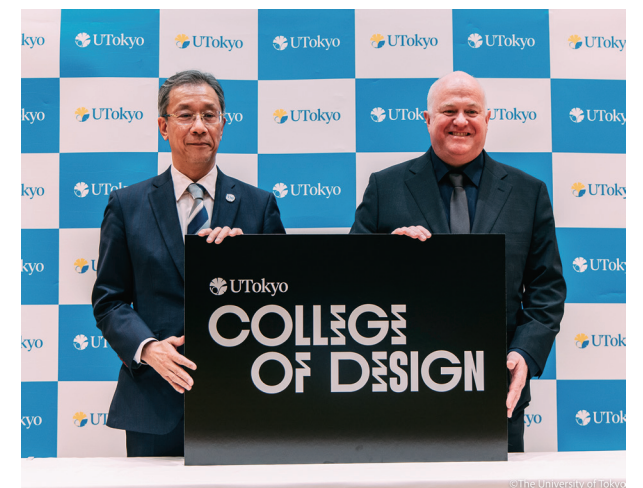
【藤井】子どもたちは「勉強」と聞くと、算数、国語、理科、社会などの座学中心の科目を思い浮かべがちです。それ

らに比べると音楽、図画工作・美術や体育はいわゆる「周辺の教科」だと考えられていますが、すべてが重要な学びです。むしろ、それらこそが人と人とをつなぐ共通基盤になる。例えばスポーツや音楽にも、それそのものの歴史や文化があり、様々な広がりがありますよね。それらを共有することが他者、特に異なる文化圏の人とのコミュニケーションにおいては非常に重要です。

一方で、現在の日本の公教育では教科の区分、さらに学年が上がれば文系・理系の区分が非常に強く、教科間の壁も厚い。そもそも区切りを作って分けて考えるような発想自体が、あまり意味を持たなくなってきたのではないかと感じています。だからこそ、初等中等教育の段階から境界を設けずに、もっとフラットに多様な学びを受け入れることのできる環境づくりが必要だと思います。

【司会】AI 時代の学びについてはいかがでしょう。

【藤井】AI について様々な議論の中で、近頃きわめて重要だと考えているのは、人間自身の創造的な喜びを失わないようにすることです。これは AI を使って学ぶことが一般的になった今だからこそ、重要性を増しています。AI は答えを出すことができます。しかし、人間が持っているような「自分で考えて発見した時の喜び」「自ら達成する喜び」はありません。AI にゼロから質問してしまうと、本来自分で到達できたかもしれない発見を失ってしまうことになります。ひいては、その発見によってもたらされたはずの喜びも失ってしまう。だからこそ、補助的なツールとして、AI と対話しながら自分のアイデアをブラッシュアップする、そうした活用の在り方が重要だと思います。最近、学生たちと AI について議論する機会がありましたが、ある学生が「AI に質問したらすぐに答えてくれた。でもその答えを自分が思いつくことができたよかったですのに、と残念な気持ちになった」と言っていました。このコメントは、非常に示唆的だと



UTokyo College of Design 開設に関する記者発表で、マイルス・ペニンントン教授(学部長予定者)とともに(2025 年 4 月)



PLIJ サマーキャンプでの講演のひとつ（2025 年 8 月）

思います。

人間にとって大切なのは、単に答えを得ることではなく、自分で考え、試行錯誤し、発見に至る過程そのものです。その過程にこそ、喜びや成長がある。だからこそ、人間自身の探究心や創造性を失わない教育が必要だと思っています。AI は強力で便利なツールですが、最終的に何をを目指すのか、どのような社会を実現したいのかを決めるのは人間です。また、AI は過去のデータを学習して答えを出しますが、本当に新しい価値を生み出すのは、人間の好奇心や違和感、あるいは「こうありたい」と考える意思だと思います。だからこそ、教育の中では、人間が自分で考え、悩み、創造する余白を残していかなければいけない。その意味でも、STEAM 教育における「A」は、これからますます重要になると感じています。探究する喜び、創造する喜び、好奇心が満たされる喜び。これらは、人間にとって本質的な価値であり続けるはずです。

PLIJ への期待

【司会】最後に、PLIJ は本年創立 5 周年を迎えます。今後、PLIJ はどのような方向性を目指していくべきか、どのような期待をお持ちかをお聞かせください。

【藤井】創立してからの 5 年間で、PLIJ の活動がここまで広がってきたことを嬉しく、また大変頼もしく思っています。

今後は、各地域で使える共通の学びの基盤、まさにプラットフォームを作っていくことが重要だと思います。特に AI をどう活用するかは、大きなテーマです。AI を活用する個別最適な学びや、学習支援プラットフォームが実現できれば、日本だけでなく世界中の子どもたちに活用してもらえる可能性があります。

まずは日本国内で使えるような、AI がアシストする学びのプラットフォームを PLIJ から生み出すことができると素晴らしいと思います。それを見据えて、学びのために AI を活用する議論をもっとしていくべきです。その上で、グローバルな展開を見据えていけると素晴らしいと思います。

PLIJ は、日本を代表するメーカーにも会員として参画していただいていますから、この点でも何か協力していただけるとありがたいですね。これからの時代は、企業とアカデミアとが一緒になって人材育成に取り組んでいくことになります。学生の段階から企業や社会と接点を持ちながら学べるような環境を整え、企業と大学との境界を広げながら、共に人材を育てていく。そんな「学びと社会を結び直す」環境の実現に向けて、PLIJ の活動にも期待しつつ、私たちも努力していきたいと思っています。

おわりに

【司会】今日は、教育改革の課題、STEAM 教育、リベラルアーツ、グローバル人材育成、PLIJ への期待など、多岐にわたるテーマについて、大変示唆に富むお話をいただきました。今日は誠にありがとうございました。（聞き手：PLIJ 理事長 浦嶋将年）

プロフィール

1993 年東京大学大学院工学系研究科博士課程修了・博士（工学）、同生産技術研究所や理化学研究所での勤務を経て、2007 年東京大学生産技術研究所教授、2015 年同所長。2018 年東京大学大学執行役・副学長、2019 年同理事・副学長（財務、社会連携・産学官協創担当）を務め、2021 年より同総長に就任（現在に至る）。その他、2005 年から 2007 年まで文部科学省参与、2007 年から 2014 年まで日仏国際共同研究ラボ（LIMMS）の共同ディレクター、2017 年から 2019 年まで CBMS（Chemical and Biological Microsystems Society）会長、2021 年から 2024 年まで総合科学技術・イノベーション会議議員（非常勤）、2025 年 6 月より国立大学協会会長。バングラデシュ・アジア女性大学より名誉博士号授与。専門分野は応用マイクロ流体システム、海中工学。設立当初より、PLIJ 顧問。

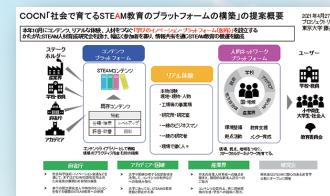
5-50-500 ～ PLIJ 設立 5 年の軌跡～

PLIJ は 2026 年 9 月で設立 5 年を迎えます。
5（創立 5 周年）、50（セミナーイベント数）、500（正会員、特別会員）となりました。
この 5 年を振り返り、関係者の皆様とともに次の 5 年のさらなる発展をめざします。

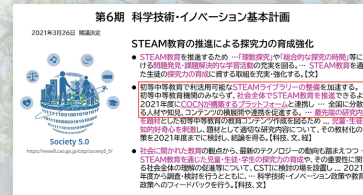
2021

2021

2月 COCN 提言



3月 第6期科学技術・イノベーション基本計画



PLIJ設立登記

9月



設立記念行事

11月



2022

2022

3月

7月

9月

12月

STEAM人材育成研究会



6月

社員総会

8月

10月

12月

会員交流プラザ



9月

第1回顧問懇談会



2023

2023

3月 JKA成果報告会

4月 PSLC公開

5月 第1回・第2回女性活躍応援イベント

6月

8月 第1回サマーキャンプ

PLIJ STEAM Learning Community

分野

エネルギー資源を求めて

エンジニアリングとテクノロジー

環境・スポーツ（健康）

AI・データサイエンス

数学

総合的・融合的・探究型の学び

第1回サマーキャンプ

PLIJサマーキャンプ 2023

8月8日-10日

会場：東大駒場IIキャンパス

2024

2024

4月 女性活躍応援イベント@大阪

7月

8月 第2回サマーキャンプ「グローバル人材」

9月 半導体イベント

10月 メンターマッチングスタート

11月

School VISIT 100 2024年10月スタート！

PLIJにおいて、メンター派遣側とメンター受け入れ側の両者のマッチングを開始。

趣旨

STEAM教育/探究学習を中心とする新たな学びに学校外の主体（大学・研究機関及び企業）が人材を学校に派遣する支援スキームを10月から運用開始する。

手続

1 受け入れ側（学校）からの要望をベースに派遣組織を探索し、両者間の調整を行うオーソドックスなフォーマーション

2 派遣側が設定する基本的なフレームをPLIJを通じて、受け入れ側である学校に開示し、両者間の調整を行うプッシュ型のフォーマーション

要望

24年度10月より、要望の受付開始。

学校からの要望、派遣側からの提案が出発点です。

2025

2025

3月 第1回STEAM・探究グランプリ表彰式

7月 産業探訪シリーズ開始

8月 第3回サマーキャンプ「AI時代の学び」「デジタルヒューマン」

11月 一日PLIJ@東北大学

12月 高校教育改革に大型の補正予算

2024年度 PLIJ STEAM・探究グランプリ表彰式 第13回STEAM人材育成研究会

第3回サマーキャンプ「AI時代の学び」「デジタルヒューマン」

一日PLIJ@東北大学

高校教育改革に大型の補正予算

2026

2026

1月 第2回STEAM・探究グランプリ表彰式

2月 高校教育のグランドデザイン 第7期科学技術・イノベーション基本計画

3月

5月 一日PLIJ@大阪大学

8月 第4回サマーキャンプ「STEAMのA」

9月 三者懇談会（企業・高校・PLIJ）開催

2025年度 第2回PLIJ STEAM・探究グランプリ表彰式 第17回STEAM人材育成研究会

一日PLIJ@大阪大学

第4回サマーキャンプ「STEAMのA」

三者懇談会（企業・高校・PLIJ）開催

PLIJサマーキャンプ 2026

～STEAMの「A」を考える～

プログラム

2026年8月4・5・6日

会場：東大駒場IIキャンパス

協力：東京大学生産技術研究所

1. 目的

高校教育改革を進めていくにあたり、高校教育界と産業界が相互に理解を深めることが重要であることに鑑み、両者を会員として擁するPLIJを拠点として三者の懇談会を計画する。

（注）2026年頃に公表した高校教育改革の基本方針（グランドデザイン）は、産業界との連携を強調しているところ。

2. 参加者

◆高校教育界（20名規模）

全国都道府県教育委員会連合会会長、日本私立中学高等学校連合会会長

東京都教育庁、神奈川県教育庁、埼玉県教育庁、千葉県教育庁の幹部および傘下の公立高校長

東京都、神奈川県、埼玉県、千葉県の私立高校長

◆経済界（20名規模）

PLIJの会員企業の役員クラス、関係経済団体の役員

◆PLIJ（20名規模）

理事、顧問、企画委員

PLIJの活動 1 STEAMコンテンツ（PSLC）（1）

■PSLCの概要

PLIJの事業の中で、中核をなす事業がコンテンツライブラリーである。2023年4月28日に創設し、約3年が経過した。このライブラリーの名前をPLIJ STEAM Learning Community（PSLC）と名付けたのは、コンテンツの提供者とコンテンツを利用する者がこのサイトを通じて「コミュニティ」を形成し、コミュニティが時間とともに成長していくことを願ってである。



登録データは、動画や資料などの「コンテンツ」、及び人との交流によってより実感を伴った学習機会の提供に向けた工場見学や出前授業などの「リアル体験機会」で構成される。これら「コンテンツ」「リアル体験機会」は独立したものではなく、例えば、ある「コンテンツ」を見たあと、実際の現場への訪問や詳しい人に話を聞きたいという「リアル体験機会」につながるケースや、反対に「リアル体験機会」で工場見学や出前授業を聞いたあと、更に学びを深めるために「コンテンツ」を調査するケースが考えられる。そのため、本サイトでは利用者側の情報検索、検索結果から対象情報の確定までを「コンテンツ」「リアル体験機会」を意識しない共通のインターフェースで行えるようにし、フラグによる絞り込みで「コンテンツ」「リアル体験機会」を切り分けられるようにしている。

サイトの収録件数は、2025年度末に1255件となっており、2024年度末に比し160件の増をみた。

2025年度通じて、コンテンツ提供に貢献していただいた組織の代表例は、ソニーグループ株式会社(86件)、名古屋大学(24件)、株式会社東芝(12件)、産業技術総合研究所(11件)、女性活躍応援イベント登壇企業群(9件)、及び八大学工学系連合会に共催いただいた女性活躍応援イベント登壇大学(7件)である。

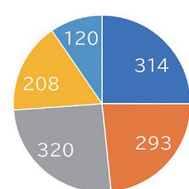
登録件数（組織種別内訳）

	2025年 3月31日	2026年 3月31日	差分
国立研究開発法人	301	314	13
大 学	263	293	30
企 業	212	320	108
支 援 団 体	206	208	2
そ の 他	113	120	7
合 計	1095	1255	160

コンテンツ/リアル体験機会の提供者
(2026/3/31時点)

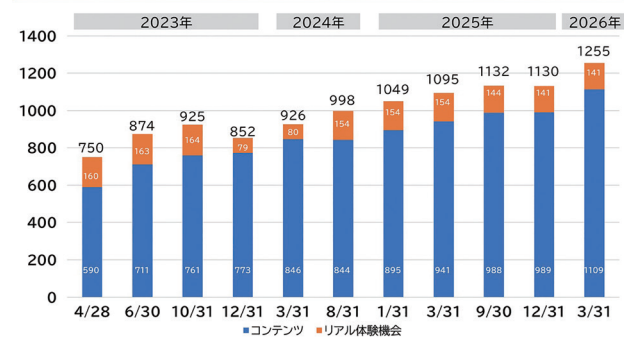
産業界				
アシックス	INPEX	鹿島建設	関電工	KDDI
三機工業	JX金属	JFEスチール	JNC	島津製作所
住友化学	住友電工	ANA	ソニー	第一三共
ダイキン	大日本印刷	大和証券G本社	東京電力HD	東芝
トヨタ	ニコン	日産	日鉄エンジニア	日本製鉄
パナソニック	富士通	丸善雄松堂	三井住友FG	三菱商事
森永製菓	吉本興業HD			三菱電機
国立研究開発法人・行政				
JAMSTEC	国際農研	産総研		NICT
NEDO	FRA	農研機構		理化学研究所
QST	気象庁	特許庁		
大学・高校・教育委員会				
北海道大学	東北大学	埼玉大学	東京大学	東京大学
東京科学大学	慶応義塾大学	横浜国大	富山大学	名古屋大学
京都大学	大阪大学	岡山大学	広島大学	九州大学
大分大学	長崎大学	樹徳高校	国分寺高校	文京学院大学
彦根東高校	富山県教育委員会	大分県教育委員会		女子中高
科学館・支援団体・その他				
科学技術館	電気学会	東北活性化研究センター	日本自動車教育振興財団	
島津科学技術振興財団				
非会員				
経産省 STEAMライブラリー		内閣府総合海洋政策推進事務局		
海上保安庁海洋情報部		JEITA		

登録件数(組織種別内訳)



■国立研究開発法人 ■大学 ■企業 ■支援団体 ■その他

コンテンツ・リアル体験機会の登録件数（推移）



■PSLCの構成と構造

ライブラリーの分野の構成と構造は、右の表のとおりであり、ライブラリーを公開して以降、一貫して維持している。第1レイヤーの6つの分野は、「サイエンス」、「エンジニアリングとテクノロジー」、「健康・スポーツ（体育）」、「芸術・リベラルアーツ」、「数学」、「統合的・融合的・探究型の学び」の6分野を基本とした。もとよりSTEAMを構成する5つの分野をテクノロジーとエンジニアリングを合体させて4つの柱とし、加えて「健康・スポーツ（体育）」は次世代の人材育成の学びにとっては欠かせない重要な分野であるべきとの観点で加えたものである。また、統合的・融合的・探究型の学びは、STEAM・探究の学びが現場で実践に移されており、実践の成果を受け止めるために設営したものである。レイヤーとしては、原則第2レイヤーに留まっているが、収録数が100件を超えるものが出てくれば、検索者の便宜を考えて、第3レイヤーを設けることを検討すべきであろう。なお、PLIJが参照している米国のPBL Learning Media

PLIJの活動 1 STEAMコンテンツ（PSLC）（2）

は、第4レイヤーのスロット数で1000を超え、スロット平均60件を収納している。「エンジニアリングとテクノロジー」の「産業システムとテクノロジー」については、当初より第3レイヤーまで構成してスタートした。企業が有するコンテンツをできるだけ高校生等の学びに活用する、あるいはキャリアを考える上での参考情報として供給するという目的で設営したものである。

このように設営した「分野」の情報を用いて、関係する「分野」に格納された「コンテンツ」「リアル体験機会」の検索が可能である。またその他の検索方法として、最近の話題、多くのユーザーが関心を持ちそうなテーマを「ジャンル」として設営しており、格納の際に「ジャンル」が設定された「コンテンツ」「リアル体験機会」はジャンル一覧から検索が可能である。更に、「コンテンツ」「リアル体験機会」に最大30件のキーワードの登録とし、そのキーワードによる検索が可能である。キーワード

検索は、「コンテンツ」「リアル体験機会」のタイトルや説明も検索対象としており、その中に検索ワードが含まれる「コンテンツ」「リアル体験機会」を検索することも可能である。

登録方式について、「コンテンツ」「リアル体験機会」を登録してもらう際に、提供者に対するデータ登録の容易性・柔軟性を確保するため、内容に関する説明情報は提供してもらったうえで、動画や資料などのデータ自体は提供者が管理するサーバにとどめておく「外部リンク」方式、及び動画や資料などのデータ自体も含めて提供してもらう「PLIJ格納」方式と両方の方式を採用している。利用者に対しては、情報検索、検索結果から対象情報の確定までの流れを共通のインターフェースで操作可能としたうえで、提供者としては2方式が選べることにより動画や資料などのデータ自体の格納場所を自由に選択できる。

コンテンツ・リアル体験機会の分野の構成・構造 (2026年3月31日時点)

分野		登録件数		割合
第一階層	第二階層	第三階層		
サイエンス	地球科学		106	443 25.1%
	宇宙科学		15	
	生命科学		140	
	物理学		73	
	データサイエンス・AI		38	
	科学研究の実践		77	
	計装・測定及び単位		17	
	サイエンスのキャリア		18	
エンジニアリングとテクノロジー	産業システムとテクノロジー	農林水産	36	315 469 26.6%
		食品	4	
		環境	27	
		製薬	3	
		バイオテクノロジー	0	
		半導体	43	
		情報通信	16	
		コンピューティング	18	
		建設	10	
		エネルギー	34	
		製造	19	
		ロボット	16	
		材料	35	
		モビリティ	74	
		運輸	12	
		金融	2	
		流通	1	
	社会システムとテクノロジー		83	
		技術の歴史・人物	11	
		技術の社会受容	25	
		ツールと機器	22	
		技術リテラシー	110	
		地域の産業	3	
	エンジニアリングとテクノロジーのキャリア		15	

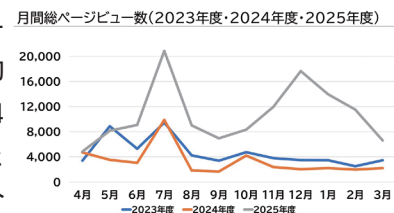
分野		登録件数		割合
第一階層	第二階層			
健康・スポーツ(体育)	病気と治療	11	44 2.5%	
	身体健康管理	12		
	心の健康管理	5		
	薬と健康	8		
	環境衛生・汚染	2		
	健康科学/スポーツ科学	4		
	医療・介護・健康増進のフレームワーク	8		
芸術・リベラルアーツ	政治学	8	107 6.1%	
	経済学・経営学	6		
	地理	6		
	初等社会科	4		
	日本歴史	4		
	世界歴史	6		
	芸術・芸能	13		
	文化	26		
	デザイン	8		
数学	算数	2	26 1.5%	
	代数	3		
	関数	13		
	幾何	4		
	統計・確率	5		
統合的・融合的・探究型の学び	次世代人材が遭遇する社会課題の学び	232	676 38.3%	
	地域の課題を克服する課題の学び	69		
	イノベーションによる課題解決の学び	53		
	キャリア形成につながる学び	244		
	科学技術の素養を深める学び	149		
	国際的な視野を醸成する学び	36		

合計:1,765(注)

(注)分野は複数設定が可能なため、登録数と各分野の合計数は必ずしも一致しません。

■コンテンツの利用状況

コンテンツの収集と対をなすのが、このサイトをどの程度利用しているかである。2025年度の実績として、ページビュー(PV)数が月間平均約10,800で、2024年度比で3倍強となった。この後紹介

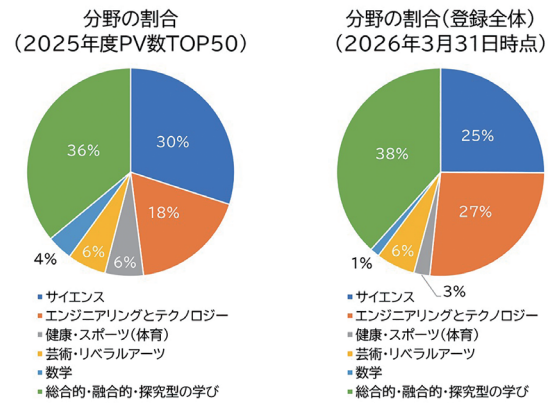


する、年度初から取り組んだ三位一体のアプローチによる効果があったのではないかと推定している。

次のページの円グラフは全体のコンテンツの分野別割合と視聴機会のトップ50件の分野別割合を対照として掲げた。サイエンス、エンジニアリングとテクノロジー、統合的・融合的・探究型の学びの3つでほぼ100パーセント近くに達している。反面、その他の分野について、視聴ユーザーの関心を向けていただくコンテンツが必要

PLIJの活動 1 STEAM コンテンツ（PSLC）（3）

と考えられる。



■三位一体のアプローチ

PLIJは、PSLCの進化と成長を継続して目指していくため、現状に満足することなく、PLIJの収集努力と呼び込める提供機関との相互関係を緊密にしていける必要がある。

コンテンツライブラリーは、PLIJの活動の中でもインフラ的な役割を果たすものであり、(1)PSLCの存在を生徒や学校教員に浸透させて認知度を向上させる、(2)Curatorから協力やアドバイスを受けるなど現場の意見を踏まえて、現場が使いたくなるコンテンツの整備に努力するとともに、コンテンツ供給の潜在力を有する大学、国研、企業との個別の意見交換の中でコンテンツ提供への道筋をつけ、コンテンツの質と量の成長をめざす、(3)特に学校現場での活用増進については、Curator等の学校教員の協力をいただき、グッドプラクティスとして横展開する、三位一体の対応が必要と考え、2025年度初めより取り組んだ。ここでは、(3)のPSLCコンテンツ活用ワークショップについて紹介する。

今年度は、東京都、愛媛県、岡山県の3都市で開催した。

東京都では、2025年11月1日(土)14:00~17:00に東京大学生産技術研究所大会議室(An301・302)で開催した。参加人数は、27名(うち高校教員22名)であった。内容は、①授業体験(14:10-14:55)、②実践事例発表会(15:35-16:55)、③活用事例検討ワークショップ(15:35-16:55)の三部構成とした。最初に、①授業体験として、滋賀県立彦根東高等学校GSI推進課長の濱川徳行先生を講師に、授業の流れを実際に体験しながらPSLC活用のイメージをつかんでもらった。その次に、②実践事例発表会として、東京都立科学技術高等学校主任教諭(物理科)の松本大輝先生、東京都立立川高等学校主任教諭(物理科)の橋本直哉先生に、PSLCの活用方法について実践事例を紹介いただき理解を深めても

らった。そして最後に、③活用事例検討ワークショップとして、PLIJ有識者アドバイザーの田中義靖先生をファシリテーターに、参加者がグループに分かれてPSLCの活用方法についてアイデア出しを行った。③の手順は、(a)コンテンツを選び、簡易な指導案を作成、(b)その指導案をグループ内で見せ合い、1つの指導案をブラッシュアップ、(c)最後に、各グループの指導案を全体で共有しつつ、コンテンツ活用と普及に関する意見交換という流れで行った。参加者の感想として、具体的な実践事例や他校・他教科の教員との情報交換を通じて、多くの学びや示唆を得られたとの声を多くいただいた。またPSLCコンテンツについては、生徒の主體的な学びを促進する教材としての可能性や、信頼できる映像教材を安心して活用できる点を評価いただいた。加えて、実践事例の更なる充実や動画コンテンツへの字幕付与、短尺化などのご意見をいただいた。

愛媛県では、2026年2月21日(土)14:00~17:00に愛媛大学教育学部2号館1階高度化ゾーンで開催した。参加人数は、20名(高校教員、大学教員、大学生/院生(教育学部)、教育委員会)であった。内容は、①導入セッション(14:05-14:15)、②ベストプラクティス講演(14:15-14:45)、③地域セッション(14:45-15:15)、④特別ワークショップ(15:15-16:55)の四部構成とした。最初に、①導入セッションとして、「PLIJとは何か~STEAM・探究を支えるプラットフォーム~」と題して、PLIJ事務局よりPLIJおよびPSLCの紹介を行った。次に、②ベストプラクティス講演として、STEAM・探究グランプリ受賞校である群馬県立高崎高等学校SSH主任教諭の岡田直之先生に、「2024年度PLIJ STEAM・探究グランプリ受賞校の取組紹介」と題して活動紹介いただいた。その後、③地域セッションとして、STEAM・探究に挑戦する地域の取組と今後の課題について、愛媛県教育委員会高校教育課魅力化推進グループ指導主事の薬真寺裕先生に「愛媛県立高校・中等教育学校におけるSTEAM教育」と題して、またFC今治高等学校里山校教諭の采野美咲先生に「高校現場から見えるPSLC活用の可能性」と題して発表いただいた。そして最後に、④特別ワークショップ「PSLCを一緒に使ってみよう~STEAM・探究の可視化と実践へ向けて~」として、PLIJ有識者アドバイザーの田中義靖先生をファシリテーターに、参加者がグループに分かれてSTEAM・探究におけるPSLCの効果的な活用についてアイデア出しを行った。④の手順は、(a)事前に見てきたコンテンツの自由な感想をグルー

PLIJの活動 1 STEAM コンテンツ（PSLC）（4）

プ内で共有(10分)、(b)各自で事前に見てきたコンテンツを活用した探究活動の支援案を設計~探究活動のどの段階での支援になるのかを意識して作成~(30分)、(c)作成した支援案をグループ内で見せ合う(15分)、(d)グループで1つの支援案を選び、それをブラッシュアップ(20分)、(e)各グループの指導案を全体で共有し、コンテンツ活用と普及に関して意見交換(25分)という流れで行った。参加者の感想として、教育現場で活躍する教員の実践事例や動画教材の活用方法を学べた点を高く評価いただいた。また動画教材を問題提起のツールとして活用する視点や良質な教材の重要性を再認識したとの声が寄せられたほか、実社会と結び付いた題材は子どもたちが学びを具体的にイメージしやすいとの意見もいただいた。運営についても適切な時間設定や参加者同士の交流も意義と評価いただき、全体として、実践につながる気づきや示唆を得ていただくことができた。

岡山県では、2026年2月22日(日)13:00~17:00に岡山大学教育学部5101で開催した。参加人数は、35名(高校生、高校教員、大学教員、企業、教育委員会)であった。内容は、①PSLCの魅力紹介(13:10-13:30)、②PSLCの活用例の発表(13:30-14:05)、③PSLCを活用したワークショップ(14:20-16:30)、④講評(16:30-16:50)の四部構成とした。最初に、①PSLCの魅力紹介として、PLIJ事務局より、PSLCの特徴、授業での活用パターン、操作方法について紹介した。その次に、②PSLCの活用例の発表として、岡山県立倉敷天城高等学校の江原光夫先生から探究活動での活用、岡山県立岡山操山高等学校の小林俊彦先生から教科・物理での活用、岡山県立岡山南高等学校の畠岡睦実先生から教科・国語での活用について紹介いただいた。その後、③PSLCを活用したワークショップを行った。高校生、高校教員、企業の方が一つのチームになり、今回は「ひなまつり」というキーワードを設定して、最初に最も近い内容であると考えた動画を探し出すウォーミングアップの後、最も離れた内容であると考えた動画を探し出し、そのキーワードが動画の内容や学びに対して、どのように離れているのかを誰もが納得するような論理性を持って説明し、そして、どのチームが最も離れた内容を論理的に説明できたかを互いに講評しあうという流れで行った。そして最後に、④講評として、PLIJ有識者アドバイザーである田中義靖先生が全体のまとめを行った。参加者の感想として、多様な立場の参加者との対話を通じて新たな視点や実践的な気づきを得られたこと、またワークショップ

を通じてSTEAM教育・探究学習への具体的な活用イメージを持てたと高い評価いただいた。PSLCについても、探究活動や教科横断型学習を支える教材・情報基盤として期待を感じていただいた。全体として、参加者に実践的な示唆と新たな学びを提供する機会とすることができた。



■Curatorの委嘱

コンテンツライブラリーを外部の眼で観察し、方向性を間違いのないものにするため、2024年度から、公開の募集手続きを経て、Curatorを委嘱した。

2025年度メンバーは、企業、大学、高校教員のメンバーに加えて、少数ながら現役高校生を含む26名の構成となり、8月7日に対面で、12月23日にはオンラインで会議を持った。8月7日の対面会議では、高校生を含む11名のCuratorより、PSLCを活用した授業の実践事例や自学自習の事例を紹介いただき、参加者による意見交換を行った。12月23日のオンライン会議では、高校生を含む7名のCuratorより、PSLCを活用した授業の実践事例や自学自習の事例、および保有するコンテンツ登録状況を紹介いただき、PLIJ事務局から、三位一体のアプローチに関するトピックスを紹介し、参加者による意見交換を行った。

PLIJ STEAM Curator (2025年度)

阿部 大輔	秋田県立新屋高等学校教諭
石川 暁羽	愛知県立旭丘高等学校2年生
石川 慎一郎	神戸大学大学院推進機構/国際文化学研究所教授
泉谷 雅吉	NECフィールディング株式会社デジタルビジネス統括部文教科SLグループプロフェッショナル
江原 光夫	岡山県立倉敷天城高等学校教諭
相知 政司	千葉工業大学工学部電気電子工学科教授
菅野 隆介	福島県立福島高等学校教諭
清田 哲男	岡山大学学術研究院教育学域教授
釘宮 隆之	大分県教育委員会高校教育課課長補佐(総務)
後藤 裕市	熊本県立宇土中学校・宇土高等学校指導教諭(スーパーティチャー)
小橋 誠吉	大阪府立天王寺高等学校2年生
嶋本 美智代	富山県立高岡南高等学校教諭
下野 啓夫	函館工業高等専門学校一般系教授
宿南 知佐	広島大学大学院医系科学研究科教授
杉上 雄紀	ソニーグループ株式会社人事部門人事2部グループ技術人事課
中田 文雄	福島大学人間発達文化学類教授
中峰 希々花	お茶の水女子大学附属高等学校2年生
野澤 優太	埼玉県教育委員会立学校部高校教育指導課指導主事
平竹 雅人	三菱商事株式会社デジタルイノベーションセンター長
藤井 亮太郎	文京学院大学女子中学校・高等学校教頭
富士川 潤樹	会津若松ザベリオン学園中学校助教諭
細川 紗瑛	お茶の水女子大学附属高等学校2年生
村田 レナ	海洋研究開発機構海洋学技術戦略部広報課特任事務副主任
保田 淑子	株式会社日立製作所研究開発グループ先端AI/バーションセンタシニアプロジェクトマネージャ
吉川 敏之	産業技術総合研究所イノベーション人材部審議役
若山 勇太	FC今治高等学校里山校特別任用職員

PLIJの活動 2 メンターマッチング（1）

■大阪府高校生「半導体 Study Tour」in 熊本

当初、大阪府立天王寺高等学校教員より、大阪府立高校の文理学科 10 校の生徒を束ねて、台湾の半導体企業を訪問できないかとの相談が寄せられた。しかしながら、当法人の現在の実力・ネットワークでは台湾の企業に繋ぐことは難しいと判断、同教員と議論の上、産学官公教に広いネットワークを持つ当法人の特徴をフルに活用し、学識経験者による講演、熊本の大学研究室・半導体関連企業の訪問、熊本の高校生との交流の 3 本柱とする方針とした。

具体的なスケジュールは以下フライヤーの通りである。

大阪府高校生「半導体Study Tour」in 熊本

スマホの中は半導体で構成されています。これからの数十年、スマホのみならず、AI、自動運転など社会を支えるのは、さらに高性能化した半導体です。それは重要な半導体ですので、高校生の皆様に知って欲しい、土地勘を付けて欲しい、自分の未来の道路の選択に役立てて欲しい、そんなきっかけになればとPLIJは関係者のご協力を得て、Tourの実現に協力させて頂いています。

2025年7月28日（月）
13:00～17:30 セミナー＆見学
（開催会場）熊本大学工学部1号館2階共用会議室A 熊本市中央区黒髪2丁目39-1

13:00～13:05 開会（PLIJ）
13:05～13:10 挨拶 小川久雄半導体・デジタル研究教育機構長（学長）
13:15～14:15 基調講演 黒田忠広東京大学特別教授・熊本県立大学理事長
「半導体の未来～脳とコンピュータとAI」

14:15～14:30 休憩
14:30～15:00 講演 青柳昌宏 熊本大学卓越教授「3次元積層技術」
15:00～15:15 移動
15:15～16:15 クリーンルーム見学（2グループ）
研究室見学・大学院生との交流

16:15～16:30 移動
16:30～17:00 講演 連川貞弘副機構長「熊本大学の半導体教育研究」
17:00～17:25 まとめ
生徒の感想、引率教員の感想、熊本大学教員の感想等

17:25～17:30 閉会（お礼）：天王寺高校教員代表

2025年7月29日（火）
10:00～12:00 大阪府高校生と熊本県高校生の交流 於：熊本高校
熊本市中央区黒江1丁目8

13:00～14:30 半導体産業工場
15:00～16:30 半導体産業工場

総合課題 一般社団法人学びのイノベーション・プラットフォーム（PLIJ）

ご協力いただいております機関
熊本大学 熊本県教育委員会 熊本県立熊本高等学校 熊本県立清々高等学校
熊本県立第二高等学校

1) 基調講演

基調講演は日本を代表する半導体研究者である黒田忠広 東京大学特別教授・熊本県立大学理事長にお願いした。「半導体の未来～脳とコンピュータとAI～」と題した講演は、半導体の製造方法から最新の熊本での取り組みまで、広範囲に及ぶ高度な内容ながら、写真とイラストをふんだんに駆使し、高校生にとって刺激的でありながら分かりやすいものであった。同講演の骨子は以下の通り。

1. 半導体とは
2. 半導体の歴史～脳とコンピュータとAI

脳の誕生 - 人類と心の誕生 - 数学の誕生 - 数学の発達 - コンピュータの誕生 / 発明 / 成長 / ムーアの法則 / トランジスタの進化 / 成長の限界 - AI の誕生 / 成長 / 刈り込み / 民主化 / フィジカルインテリジェン

ス - 脳とコンピュータとAI - コンピュータのパラダイムシフト

3. 半導体を巡る世界情勢
4. 人材をどのように育成するのか
5. 世界の中心で「火の国・水の国・半導体の国」を建設する

講演の最後の黒田先生の以下のコメントは半導体 / 教育に携わる全ての者にとって肝に銘じておくべきメッセージである。

「日本がこれから半導体に投資をしてもう一回やるんだというなら、若いみなさんが頑張れるような環境を私たちが創ること、教育が必要」



2) 現地・現物に触れる

高校生にとって、講演だけではなく、現地・現物・現役の企業人 / 研究者に触れる機会は極めて大事である。参加した生徒の感想の中には、「実際の半導体製造現場や企業の雰囲気を感じて刺激になった」、「大人の本気を見た感じが面白かった」という印象深いコメントもあった。

尚、熊本大学には、講演、クリーンルーム / 研究室見学、大学院生との交流と、多岐に亘るご協力を頂き、感謝申し上げます。

3) 大阪府と熊本県の高校生の交流

ツアー 2 日目には大阪府の高校生（天王寺高校・高津高校・四条畷高校・生野高校・岸和田高校・豊中高校）と熊本県の高校生（熊本高校・清々高等学校・熊本第二高校）の交流会を行った。

プログラムは両府県から選出された代表生徒が事前にオンライン会議を実施し、自主的に設計したもので、「他校の研究発表から刺激を受けた」という交流自体の成果とともに、責任感と主体性の涵養という点でもまたない機会となった。

PLIJの活動 2 メンターマッチング（2）

■四日市高校× HORIBA 水質計

みらい探究プロジェクト 2025

HORIBA グループ（株式会社堀場製作所、株式会社堀場アドバンステクノ）では、2025 年度より、高等学校に HORIBA の水質計を貸し出し、HORIBA の社員によるメンタリングを行って、探究型の学びを支えるプログラム「高校生× HORIBA 水質計 みらい探究プロジェクト 2025」を開始した。PLIJ は HORIBA からの依頼に基づき、HORIBA 自身が強いネットワークを持つ京都府以外の近畿圏内の高等学校会員に案内、三重県立四日市高等学校より応募を得た。

1) アコヤガイを用いた水質浄化作用の研究

四日市高校では、2024 年度、三重県特産のアコヤガイや同類クロチョウガイに水質浄化作用があることを目視で明らかにした。一方で、具体的にどのような物質が変化したのか、アサリや他の二枚貝と比較し、違いがあるのを明らかにしたいと考えていたところ、HORIBA からの提案はまさに渡りに舟であった。

2) 寄り添い型メンター

探究活動に力を入れている学校では、OB/OG 等のネットワークを駆使して、研究者や企業人を招いて講演 / 出前授業をやって貰う機会は比較的多いようである。一方で、個別最適な学びの重要性が高まっている中、多様な生徒の多様な探究テーマに沿って、単発ではなく、数週間、或いは数か月間に亘って専門家の指導（メンタリング）を仰ぐことは容易でない。

今回、上述の探究活動を行っている生徒 2 名に対し、2025 年 7 月から 2026 年 3 月の 9 ヶ月に亘り、のべ 52 名の HORIBA 社員が対面 4 回、リモート 4 回の指導 / メンタリングを行った。HORIBA の負担は小さくなくなったものと思われるが、「寄り添い型メンター」の一つのモデル・ケースとして、特筆に値する活動と言える。



女子生徒 2 名（左側）を指導するメンター（右側）

3) 実施内容

堀場アドバンステクノ社製の水質計を四日市高校に貸与し、水質計の使用手法や測定項目のレクチャー、データ解析の方法などを通じて課題研究を支援。2025 年 8 月には同校生徒約 15 名を対象に、同社事業・水質計、および本プログラムの動機となった SDGs に関する講義を対面にて実施。2026 年 3 月には活動の締めくくりとして、同校生徒 20 名を同社に招き、課題研究の成果報告、同社の見学、SDGs と水質計測について考えるワークショップの場を設定した。

同校 1 年生（当時）2 名は HORIBA のメンターの指導を受けながら、水質計を用いて、真珠母貝である三重県特産のアコヤガイと、水温上昇に伴い増加しているクロチョウガイを対象に、水質の変化の観点から両種の共存可能性および新たな産業創出への可能性について探究活動を行い、3 月のワークショップでは、他の生徒 20 名に対し、活動の成果を共有した。



2026 年 3 月 堀場アドバンステクノ社での成果発表の様子

4) メンタリングの成果

メンタリングを受けた生徒 2 名は、水質計の正確な操作方法や測定条件の統一の重要性について理解を深めた。また、得られたデータの整理・解析方法について具体的な助言を受けたことで、結果の信頼性や再現性を意識した研究へと改善することができた。さらに、水質変化と貝類の生理的応答との関係について多角的に捉える視点を得たことで、当初は単純な比較にとどまっていた研究内容が、要因分析を含むより発展的な探究へと深化した。これらの経験を通して、科学的根拠に基づいて考察する姿勢の重要性に気づくとともに、今後の研究においても仮説検証のプロセスを意識して取り組む必要性を認識した。

さらには、成果を他の生徒と共有することにより、この活動による“学び”を直接指導を受けた 2 名だけでなく、多くの生徒の財産とすることができた。

PLIJの活動3 産学官公教の交流 女性活躍応援イベント（1）

女性が今以上に社会進出し、社会のあらゆる分野で活躍することは、我が国全体の課題である。PLIJは中学生・高校生女子の皆様へ将来のありたい自分を考えてもらうきっかけにもらうべく、「女性活躍応援イベント」と名を付けた、女子中学生・高校生に向けて入社後10年程度の女性社員が中学・高校時代の生活と学び、大学への進路選択、大学での学び（研究）、社会人になるにあたっての進路選択を率直に語って頂くイベントを企画し2023年度から開催した。

本講演会は生徒のみならず、保護者や教員の方々にとっても、ダイバーシティ、男女共同参画、リケジョが時代のキーワードになっている昨今に、女性の活躍の場を拡大していく意識を共有できるイベントであり、リアル会場とZoomウェビナーによるハイブリッド形式で行うことで全国の中高校生へ登壇者をロールモデルとして意識してもらえるものである。リアル会場では講演会の後、登壇者と参加者が直接懇親できるフリータイムを設定することでささいな質問や悩みを共有できる機会を設けることも重要なポイントである。

2023年度、2024年度は上下期に各1回2日間のスケジュールで実施したが、2025年度は、同様の女性社員講演会としては上期の7月に東京で開催した。2024年度から導入している、教室やクラブ単位等、複数の生徒の参加となる集団視聴校の参加は1校あり、私どもの取組が広く受け入れられてきたと考えている。このイベントに参加した参加者からは、「社会人になって少し経っている

方ばかりで、大学のことに留まらず、入社後のエピソードも聞けたところがよかった」「自分の行動力を高めたり視野をもっと広げたいと思うきっかけをくれた」（高校生）「大変前向きな素晴らしいお話だった。若手の方であったことも、こどもの目線から見て身近に感じよかった」（保護者）とご評価いただいた。なお、2025年度までの登壇者のリストは下記のとおり総勢66名、企業数45社（複数回御参加有り）である。



上の写真は、7月12日の女性活躍応援イベントで、滋賀県の彦根東高等学校とオンラインを繋ぎディスカッションを行った際の映像である。講演は周囲の人々と共有することで理解度を深められるが、ウェビナーでは感想が個人で留まりがちである。集団視聴は生徒の集団と企業社員との交流ができ、各々の体験を有意義にするメリットが見出される。

注 ○印はPSLC収納 34件

2023年5月13日(土) ファシリテーター 森和美 (三菱商事) ○JNC石油化学/小杉実沙 清水建設/田嶋友貴 ソニー/長谷川桜 ○東京電力HD/井上華那 三菱地所/橋本沙知 三菱商事/金田理子 ○富士通/有本優和	2023年6月17日(土) ファシリテーター 廣井ゆりあ (日本電気) ○全日本空輸 /海津綾夏 森末ちなみ ○図書館流通センター /池田智美 ○ニコン/信田萌伽 ○日鉄エンジニアリング /坂本晴香 ○日本電気/北村真奈美 ○三菱電機/伊藤慎紀 ○森永製菓/蓮池舞香	2024年1月20日(土) ファシリテーター 上野明子 (KDDI) ○住友電工/寄村麻子 ○関電工/尾方舞華 ○三井住友FG/山北絵美 吉本興業HD/王柳 ○KDDI/木戸美冬 ○鹿島建設/原田萌 IHI/大野瑠衣	2024年1月21日(日) ファシリテーター 折笠光子 (日鉄エンジニアリング) ○住友化学/伊藤瑛子 JX金属/熊倉紗代子 ○大日本印刷/松山麻珠 日立製作所/渡邊真由美 ○INPEX/阿部杏葉 ○丸善雄松堂/松山美生	2024年7月23日(火) ファシリテーター 関根千津 (住化技術情報センター) ○アシックス/森川綾子 大阪ガス/中瀬悠 ○神戸製鋼所/吉中咲良 塩野義製薬/八木まりや ○住友化学/師井奈緒子 大和ハウス工業/平松咲 ○三菱電機/本倉紗希
2024年7月24日(水) ファシリテーター 國井美和 (住友電気工業) ○島津製作所/本郷那美 SCREENHD/三谷祐子 住友電気工業/池邊菜紀 ○ダイキン工業/曲師香緒里 竹中工務店/上田宏子 パナソニックHD/未弘優子 堀場テクノサービス/中野ひとみ	2024年12月14日(土) ファシリテーター 山北 絵美 (三井住友銀行) ○三機工業/尾山美佳子 ○JNC/小原彩 ○清水建設/田嶋友貴 ○東芝エネルギーシステムズ /河野 菜菜子 ○日産自動車/大淵 花織 三井住友FG/中西 芳枝 ○三菱電機/田内 葉子	2024年12月21日(土) ファシリテーター 山田 由香子 (ニコン) ○鹿島建設/尾原鞠子 ○住友化学/竹村美保 太陽誘電/須藤里奈 東京電力HD/冠城 さやか ○ニコン/野中 杏葉 三菱商事/川辺 実希 森永製菓/樺田 侑奈	2025年7月12日(土) ファシリテーター 福田加奈子 (住友化学) ○鹿島建設/大貫かおる 三機工業/小佐部葵 ○清水建設/後藤笑加 竹中工務店/関優洋子 ○第一三共/高橋智美 ○住友化学/猪爪舞花	2025年7月19日(土) ファシリテーター 西村佳壽子 (ソニーセミコンダクタソリューションズ) ○ソニー・インタラクティブエンタテインメント/岩城春香 ○東京電力HD/佐藤祐貴子 ○日本電気/長城沙樹 ○富士通/岡安明香 ○三菱電機/山口智香

PLIJの活動3 産学官公教の交流 女性活躍応援イベント（2）

2025年度の下期では、女性活躍応援イベントの新たな試みとして八大学工学系連合会との共催イベントを11月18日（土）に開催した。

八大学工学系連合会は北海道大学、東北大学、東京大学、東京科学大学、名古屋大学、京都大学、大阪大学、九州大学に所属する工学系学部・研究科によって構成される団体で、女性理工系人材の育成を強力に推進している。当法人も共に女性の社会での活躍拡大を目指しており重なる所が多いため、女性活躍応援イベントとして、八大学工学系で学ぶ女子学生よりメッセージを発信するイベントを企画した。具体的には女子大学生・大学院生が登壇するウェビナーを開催し、当法人のネットワークを効果的に活用し全国的女子中高生へキャリア支援と進学について学べる講演会を行うものである。

幅広い質問に対応するため、ファシリテーターとしてソニーセミコンダクタソリューションズ株式会社の西村佳壽子様に御参加頂き、さらに企業人として2名にご陪席を頂いてキャリア支援に御協力頂いた。進学については、各大学の女性教員の方々に陪席頂き、関係の質問が出たときにご説明頂くこととした。当日ご参加頂いた方々、講演者、陪席の先生・企業人のお名前を下图に纏める。PLIJのキャリア支援としては、これまでご講演頂いてきたアーカイブより八大学ご出身の女性社員の講演を抜粋し纏めた動画を投影することとした。

本イベントでの集団視聴校は4校で、昭和学院秀英中学校・高等学校（千葉県）、英理女子学院高等学校（神



ウェビナー講演者集合写真

奈川県）、熊本県立宇土中学校・宇土高等学校（熊本県）、長崎県立長崎南高等学校（長崎県）と広い範囲からの御参加となった。

ウェビナー参加者は110名であり、イベントへのアンケート結果は5点満点で平均4.48と高評価だった。個々頂いた御意見では「大学生の話を聞いて意外と楽な気持ちで大学に入学しても大丈夫と知ることができ、今やっておくべきことがわかった」（中学生）、「高校の先輩が出てこられて一気に身近に感じた」「今興味がある大学の先輩のお話を聞くことができた」（高校生）、「高校生にとってもいい刺激になった」（教員）と好評であった。本イベントの参加者の分布について26都道府県からの御参加を頂いており、特に大学近辺の地域から進学を想定し参加されたと思われる生徒さんが、登録・アンケートとともに見受けられた。当法人が各地域で活動するにあたっての取組の一つになると期待される。

上記結果を受け、当法人としては次年度も継続しての開催を検討したく、八大学工学系連合会への報告を行った。

8大学工学系女子学生の進路選択 ～理系を目指す中高生へのメッセージ～

11/8 2025 Sat. 13:30～16:30



ファシリテーター 西村 佳壽子 様（ソニーセミコンダクタソリューションズ株式会社）

主催者挨拶 PLIJ理事長／浦嶋 将年

共催者挨拶 八大学工学系連合会 代表理事・運営委員会委員長／山本 元司 様

- プレゼンテーション（前半）

北海道大学 石森 結衣 様、東北大学 菊地 志乃 様、東京大学 松尾 奈々穂 様、東京科学大学 室之園 相生 様

- 動画投影 「女性社員からのメッセージ～PLIJ女性活躍イベントのアーカイブから～」

- プレゼンテーション（後半）

名古屋大学 服部 未緒 様、京都大学 張 拓 様、大阪大学 高見 優梨子 様、九州大学 坂田 遥渚 様

- 質疑応答 ウェビナーおよび集団視聴校からの質問受付

〈教員〉 大友 陽子／北大准教授 有働 恵子／東北大学教授 小熊 久美子／東大教授 青木 才子／東科大准教授
キム ダソム／名大助教 杉野 未奈／京大准教授 伊丹 絵美子／阪大准教授 坂東 麻衣／九大教授

〈企業人〉 宮永 美紀／住友電工執行役員

服部 美里／NEC政策渉外部 担当部長

主催：一般社団法人 学びのイノベーション・プラットフォーム Platform for Learning Innovation - Japan (PLIJ)

共催：八大学工学系連合会

PLIJ の活動 3 産学官公教の交流 サマーキャンプ（1）



■ 登壇者・参加者人数の内訳、プログラム時間

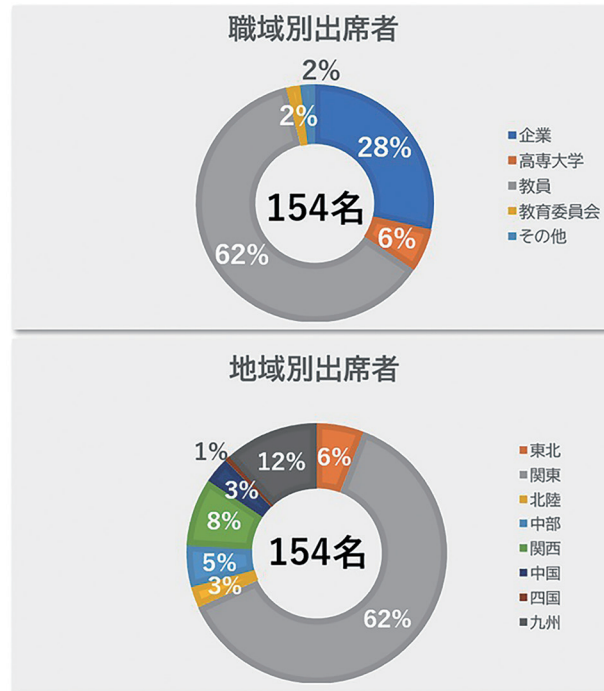
参加者 154名 (104組織)	●職域別 企業44名(26) 高専大学9名(8) 教員95名(62) 教育委員会3名(3) その他3名(2)
	●地域別 北海道0名 東北9名(7) 関東96名(62) 北陸4名(4) 中部9名(3) 関西13名(10) 中国5名(4) 四国1名(1) 九州18名(13)
プログラム	●事前課題提出 98.7%
	総時間 17H10M(休憩除く) (双方向プログラム 9H5M)
登壇者 41名	53%が双方向プログラム
	●大学 8名 ●企業 12名 ●行政 3名 ●高校教員 3名 ●高校生 12名 ●学生 3名

サマーキャンプは、産学官公教の垣根を越えた交流を目指し、かつ、「STEAM 教育を通じた探究力の育成」を一貫したテーマとして開催するものである。2023 年度に開催したサマーキャンプは、参加者からの歓迎の声を背景に恒例行事化することとし、2025 年度は、8 月 5、6、7 の 3 日間開催した。テーマとして、「STEAM 教育を通じた探究力の養成」に加えて、生成 AI の爆発的な進展を受けて、今年のサブテーマに「AI 時代を迎えて、学びのあり方」を掲げた。参加者は、総勢 154 名と 24 年度に比して 10 人強増になった。プログラムの構成は、講演ばかりでなく、ワークショップに時間をさき、総時間の 53% を双方向プログラムにあてた。出席者の職域別、地域別の分布は次ページのグラフに示すとおりとなった。職域別では全体の 62% が教員、28% が企業関係者であった。両職域とも 24 年度に比して数を増やした。一方、地域別では、関東が全体の 62% となっている反面、参加者のいない地域も見受けられた。

プログラムの中で、特筆すべきは「デジタル・ヒューマン・ディベート」である。これは、筑波大学落合陽一准教授（当時）の研究室で組み上げた生成 AI を活用したサンプルコードを三つの高等学校有志に提供し、生徒さんの側は自らのアプリケーションやテーマに沿ったコンテンツを学習させ、作成したデジタルアバター同士でディベートを行った。ディベートを評価するレフェリーには藤井東大総長、金出 CMU 教授および落合先生にあたっていた。本番ではスムーズなディベートが展開され、約半年間の高校生の努力が実を結んだ。

キャンプ終了後に参加者や講演をお願いした講師陣から感想のコメントをいただいた。これらを総括すると以下のとおりである。

1. 産学官公教の交流に向けた双方向プログラムが、多く



の参加者から高評価を得た。DX、AI の考え方や視野が広がり、かつ教育や企業の新たな課題のヒントが得られ、日々接点のない方との意見交換は重要な財産となった、パネルディスカッションや基調講演を踏まえて、ワークショップで自分の考えを言語化し、他の参加者と意見交換をすることができた点が有意義であったなど高評価コメントを多数いただいた。

2. STEAM 教育・AI 人材育成や AI 時代における学びの現場の在り様への理解に向けた講演について高評価を得た。特にパネルディスカッションでは、アカデミック、ビジネス、教育のそれぞれの現地の最前線でご活躍されていた方々の知見に接することができた、東大生産研・先端研での日本の最高峰の先生方の研究に触れる機会は本当に学びの多いものであったな

PLIJ の活動 3 産学官公教の交流 サマーキャンプ（2）

ど高評価を多数いただいた。

3. 参加者の職域別内訳は、昨年に比べ教員の割合が増え大学国研の割合が減ったことで、期待するバランスから差分が生じる結果となった（次頁参照）。但し、今年も職域が異なる参加者との交流により、人脈が形成され、相互理解が深まり有意義であったとのコメントを多数いただいた。

4. 来年度以降の継続開催の要望、参加の意思表示を多数いただいた。プログラムの充実状況について高評価をいただきつつ、時間的に余裕のあるプログラムなどの要望も散見された。

アンケートで、サマーキャンプ期間中、気づきや触発されたこととして回答があった内容まとめと代表的意見は以下の通りであった。

1. 生成 AI の活用と教育現場への可能性

生成 AI を教育や業務に取り入れる具体的な可能性、現場での実践を考えるきっかけが得られた。AI を単なる効率化の道具でなく、創造的な学びや生徒の表現力を引き出す手段として活かせるという視点が広がった。代表的意見：「生成 AI の現状や活用の方向性がはっきり見え、学校教育にすぐ活かせる事例を学べた」「会話や文章が苦手な生徒が AI に表現を補ってもらい、才能を発揮できる可能性に気づいた」

2. リアルな体験・交流の価値の再認識

AI 時代だからこそ、リアルな体験や人との直接的な



交流の重要性を再確認し、異業種や異なる職域の人々と接することが、新たな視座や学びへの刺激になった。代表的意見：「AI の時代だからこそ、リアルな体験が重要という話は教育を見直す良い機会になった」「普段接しない分野の人から課題を抽出でき、有意義で刺激的な三日間だった」

3. 教育観・マインドセットの変革の必要性

教育者や社会全体のマインドセットを変えなければ、AI や VUCA 時代に対応できる人材は育たないとの認識を持つことができ、STEAM 教育や探究学習の方向性に関する議論を通じて、自分の教育実践を見直すきっかけが得られた。

代表的意見：「教育者側のマインドセットが変わらないと、AI 時代に挑戦する人材は育たないと感じた」「STEAM 教育をどう現場に根付かせるかを考えるきっかけになった」

2025 年サマーキャンプ公演等・双方向プログラムリスト

講演等			双方向プログラム		
基調講演	学びを社会と結び直す～ロボットやAI技術の進展を受けて	東京大学総長	藤井輝夫	写真撮影	
対談	AIとロボットの人材育成はどうあるべきか	カーネギーメロン大学創始者記念全学教授 特定非営利活動法人サクラテラス理事長	金出武雄 寺崎優美		
基調講演・対談 質疑	＜ファシリテーター＞ 吉本興業タレント		黒うば教授	ワークショップ (1)	生成AIを使ってどこまで達成できるか ①25名程度のWGを組織し、 ②参加者が5名1組のチームに分かれ ③生成AIを駆使、成果物を得る体験をチームで共有する試み
講演	Society5.0の実現に向けた教育・人材育成	内閣府科学技術・イノベーション推進事務局企画官	河村 雅之		＜リーダー＞ 東京大学生産技術研究所准教授 ＜TA＞ 東京大学生産技術研究所大学院生
国の取り組み	質の高い探究的な学びの実現に向けて 未来の教室と社会に開かれた学びの実現に向けて	文部科学省初等中等教育局教育課程課学校教育官	堀川 拓郎		
国の取り組み 質疑	＜ファシリテーター＞ 吉本興業タレント		黒うば教授	懇親会	
パネルディスカッション (1)	AI人材育成	SB Intuitions株式会社取締役 兼 CRO 富士通株式会社AI戦略本部シニアマネジャーGlobal-FDE 東京都立小岩高等学校主任教諭 東京大学大学院工学系研究科技術経営戦略学専攻准教授 ＜ファシリテーター＞ 東京大学生産技術研究所准教授 千代田区立九段中等教育学校主任教諭 東京大学先端科学技術研究センターシニアリサーチフェロー やまがたAI部運営コンソーシアム会長/株式会社オーツー・パートナーズ代表 朝日新聞社編集委員(こども・教育) ＜ファシリテーター＞ 株式会社日立製作所研究開発グループ 先端AIイノベーションセンターシニアプロジェクトマネージャ ＜モデレーター＞	井尻 善久 寺島 真生 橋本 哲也 吉田 聖 菅野 裕介 市川 淳司 中島 賢龍 松本 晋一 宮坂 麻子 保田 淑子		
パネルディスカッション (2)	学びの現場の在り様	筑波大学准教授 ＜出場チーム＞ 埼玉県立大宮高等学校 渋谷教育学園渋谷中学校 東京都立戸山高等学校 ＜司会＞ お茶の水女子大学附属高等学校 ＜審査委員講師＞ 東京大学総長 カーネギーメロン大学創始者記念全学教授 筑波大学准教授	落合 陽一 クレアシオン大宮 沢 浩 ToyaMind 生徒有志 藤井 輝夫 金出 武雄 落合 陽一	ワークショップ (2)	①参加者全員がプレゼン(事前資料)を行い ②WG全体の討論を経て ③議論の総括の方向性について議論する。
デジタルヒューマンディベート	筑波大学落合陽一研究室との共同開催			職域別交流会	企業、国研・大学、学校教員・教育委員会の職域ごとの交流
				ワークショップ (3)	各WGの代表者を中心にWGのレポートをそれぞれまとめる。
				ワーキンググループからの報告	6つのWGの代表プレゼンター発表 ＜ファシリテーター＞ 朝日新聞社編集委員(こども・教育) 宮坂 麻子

PLIJ の活動 3 産学官公教の交流 産業探訪シリーズ (2)



■化学の力

り返えられた。本セミナーのプロデューサーとして、セミナー構成の企画を一貫してリードされた住友化学元副社長でPLIJの上田博企画委員長は、「化学が好きになって欲しいと願う講師の皆さんの思いが溢れていたと思います。」と当日、会場に詰められた際の感想を述べておられた。また、会場校となった昭和学院秀英高校の田中尚子校長は、後日、「化学の面白さが直接伝わり、理系キャリア教育へ大きな意義があった。」と評価いただいた。産業探訪シリーズは、対象分野の科学技術に触れ、産業活動への理解を深めていただくとともに、キャリア教育としても、有効な方策であると、再確認できた催しであった。関係者のコメントからも明らかである。

高校生向け産業探訪シリーズ(第1回)
“未来社会デザインとメタラジ”
 ◎東京国立高等学校

金属は鉄や銅といった馴染みのある国民生活に必須の基礎材料である。エッセンシャル・インフラストーリーである一産業がサステナブルに発展するための課題を未来の担い手である高校生と我が国最大の金属材料の研究センター及びエンジニアと共有する。このセミナーが、これからキャリアパスについて考えるきっかけになれば。



14:30~15:10

- 開会挨拶 PLI代表者
●交流会 立川高等学校生徒

<第一部>基礎講演

- ◎「未来社会デザインとメタラジ」
田中敬宏／大版大学理事・統括学長(30分)

15:10~15:55

<第二部>メタラジの課題・最先端技術

- ◎「世界は鉄でできていて-未来のクルマと環境への挑戦」
西畑ひとし／日本鋼板株式会社技術開発本部技術戦略課(15分)
- ◎「環境と安全を両立する新しい建築用高強度鋼材の開発」
中山優一／JFEスチール株式会社スチール研究開発センター材料研究科(15分)
- ◎「地球とデジタル」をつなぐ金貨・先端素材とリサイクル
久家雄樹／IXX金属株式会社技術本部 (15分)

15:55~16:30

<第三部>パネルディスカッション

- ◎ファシリテーター 岡部敬典／東京大学副学長・教授
- ◎パネリストカシヨン 参加高校生による登壇者と委員中心
- ◎クロージング 立川高等学校教員代表

お申し込み方法

QRコード、または下記リンクから、お申込みください。
 参加無料です。
<https://www.zoom.us/join?secretkey=info@pli.or.jp>
(登録したアカウントがない方は)検索より二枚目のスクリーンショットをご覧ください。
 問合せ先＝一般社団法人学びのイノベーションプラットフォーム
 事務局：info@pli.or.jp

今年度のセミナーの参加者は立川高等学校の生徒さんになります。
 他の学校の生徒さんはZoomウェブチャットで視聴ください。

主催 一般社団法人学びのイノベーションプラットフォーム(PLI)
協力 東京都立立川高等学校

葛城俊哉三菱ケミカル常務取締役・CTO（当時）は、ファシリテータとしてこのセミナーに登壇された。「若い世代の理系離れの中で、企業から「ものづくり」の面白さと価値を中高生に向けて発信し、関心を持ってもらう試みは大変有意義かつ効果的であったと感じています。」と振

中高生のための産業探訪シリーズ“化学の力”

◎昭学院秀英中学校・高等学校(千葉市幕張)

化学は、高校の理科で学ぶ身元存在ですが、今回のテーマは、勉強としての化学が実際にどのように我々の生活や社会に貢献しているのかを共有するプログラムです。大学の応用領域としても広く、環境問題やエネルギー問題への対応、新しい材料の開発、医療の発展など幅広い分野で化学の力が生かされています。今回はその中でも、一橋館で目にするような分子(ナノ)ととも重要な化学の一面を高校生の方と一緒に紹介したいと思います。

※学校関係者の皆様へ：本イベントの成功を共に目指し、ご協力をお願いします。学校のPRにもなります。学校行事として、あるいはクラブ活動の一環として取り上げていただき、生徒さんが参加して観戦いただくことを願っております。

13:30~14:10 ●開会挨拶 PLII代表者 ●司会 開催校生徒 <第一部>基調講演 ●「大学で化学を学ぶとは」 西野 孝 / 神戸大学名誉教授/客員教授・高分子学会会長(30分) 14:10~14:55 <第二部>化学の力の多様な展開 ●「半導体は化学の力で作る」 高木悠二 / 住友化学(15分) ●「食を豊かにする化学の力」 松浦 博史 / 三菱ケミカル(15分) ●「デジタル技術が解き明かす化学の力」 板神 弘也 / 三菱ケミカル(15分) 14:55~15:30 <第三部>パネルディスカッション ●ファシリテーター	葛城 俊哉 / 三菱ケミカル取締役・常務執行役員・CTO 福岡 加奈子 / 住友化学常務執行役員 飯田 及び 集住視聴校参加高校生vs全登壇者との質疑 開催校教員代表
--	---

2025

12/18

木

13:30 ~ 15:30

お申し込み方法

QRコード、または以下リンクから、お申込みください。
参加費無料です。

https://us02.webb.zoom.us/join/register?WN_Oxioe90b5t2R_VZz8tXf-Q

※Zoomアプリ（ダウンロード）をインストール後、登録されたメールアドレスにメールが届きます。

問合せ先→一般社団法人さびのいノベーションプラットフォーム
事務局 info@oij.or.jp

今回のセミナーの会場参加者は昭学院秀英中学校・高等学校の生徒さんになります。他校の生徒さん教員はZoomウェビナーで視聴ください。

主催 一般社団法人さびのいノベーションプラットフォーム(PLIJ)

協力 昭学院秀英中学校・高等学校

フライヤー

PLIJの活動 4 STEAM・探究グランプリ（1）



2024年度からスタートした表彰制度「PLIJ STEAM・探究グランプリ」は学校のSTEAMや探究型の新たな学びを産官学で支える取組、企業・大学などが中心になって行う学びなど「社会全体で新たな学びを支える」取組である。一連のプロセスを経て「グランプリ」11件、「特別賞」として2件を決定した。新たな後援団体である朝日新聞社から「朝日新聞社賞」が設けられ、グランプリ受賞者より1件を選出した。1月26日に表彰式および報告会を東京大学生産技術研究所コンベンションホール / オンラインのハイブリッド形式で行った（各受賞者のプロフィールは22ページから34ページに掲載）。

2024年度同様に、当法人が築いてきたネットワーク、ならびにご協力頂いた各団体への広報・周知に努めた。具体的には次に示す経済団体、教育団体に趣旨などについてご説明し、参加組織へのご周知、ご協力を依頼した。

【経済団体】
日本経済団体連合会、経済同友会、日本商工会議所、各地域の経済連合会、産業競争力懇談会

【教育関係団体】

全国都道府県教育委員会連合会、日本私立中学高等学校連合会、国立大学協会、日本私立大学連盟、日本私立大学協会、公立大学協会、国立高等専門学校機構、国立研究開発法人協議会、日本理科学協会、東京都理科教育研究会

【PR・広報】（新規取組）

朝日新聞社の第1回表彰に関する特集記事（2025/7/1全国版）、募集動画の制作、日本教育新聞社（日本最大の教育専門全国紙）への募集広告掲載

応募期間は7月1日より10月10日までとし、今年度は34件の応募があった。選考委員による評価作業と対面による審議によって、下記の受賞者が決定した。

表彰式では13件の代表者に盾の授与を行ったほか、選考委員長である遠藤 NEC 特別顧問から、選考結果と今後の教育革新への期待が述べられ、主賓としてお招きした野依良治博士からお祝いの言葉を頂いた。両氏から頂いたメッセージをここに採録させて頂く。

選考にあたった委員の皆様には短い期間で精力的に取り組んでいただいた。

委員長 遠藤 信博 NEC 特別顧問

委員 金出 武雄 カーネギーメロン大学創始者記念全学教授 木村 健太 千代田中学校・高等学校校長 清川 卓二 清川メッキ工業取締役副社長 須賀 晃一 早稲田大学副総長 津田 敦 東京大学理事・副学長 波多野 睦子 東京科学大学理事・副学長 宮坂 麻子 朝日新聞社編集委員 宮田 明子 東京都立国立高等学校校長

2025年度 PLIJ STEAM・探究 グランプリ受賞者

グランプリ	秋田県立新屋高等学校 「新屋高校 SSC（SDGs × STEAM × Career）プロジェクト」 愛媛大学「四国型次世代科学技術チャレンジプログラム」実行委員会 『四国型次世代科学技術チャレンジプログラム』 大阪大学 『高校生向け STEAM 教育「SEEDS プログラム」』 加賀市教育委員会 『加賀小中一貫型 STEAM プログラム』 鹿児島県立市来農芸高等学校 『昆虫 × STEAM で挑む地域課題解決』 千葉大学 『デザイン思考を取り入れた STEAM 教育による次世代人材養成』 東京大学大学院情報学環開沼博研究室 『問う力を磨き実践する探究プログラム「福島学カレッジ」』 日鉄エンジニアリング株式会社 『エンジニアリング教育プログラム 情熱・先端 Mission-E』 広島県立祇園北高等学校 『「好き」から始まり、「好き」を学び、「好き」を究める探究活動』 宮城県仙台第三高等学校 『産学官連携により探究の深化を目指す「三高型 STEAM 教育」』 宮崎県立延岡高等学校 『地域協働による延高の未来創造人材の育成』
特 別 賞	朝日放送テレビ株式会社 『「Q-1-U-18 が未来を変える★研究発表 SHOW-」の制作と全国放映』 鎌倉市教育委員会 『「鎌倉スクールコラボファンド」の取組』
朝日新聞社賞	宮城県仙台第三高等学校 『産学官連携により探究の深化を目指す「三高型 STEAM 教育」』

PLIJの活動 4 STEAM・探究グランプリ（2）

■遠藤信博選考委員長のメッセージ



遠藤 信博 様

PLIJ への日頃よりのご支援に深く感謝申し上げます。

PLIJ で は、STEAM 活動を活性化させる観点から「STEAM・探究グランプリ」「特別賞」を、本年も引き続き選出させていただきました。教育の本質は個の自立です。社会への価値創造・貢献を可能にするため、一人一人の個性を尊重し、STEAM 教育を通じて確かな判断力を養い、自律的に生き抜く力を育むべきと考えます。今回も全国から様々な優れた活動にご応募いただきました。深く感謝を申し上げます。

STEAM 教育は、従来の「教える教育」から、「育てる教育」への変化を促し、スキル中心の評価から、コンピテンシー中心の価値創造力の評価の導入を促します。世界にとって、なくてはならない国「日本」そして、それを支える価値創造力の継続的な人財育成には、この STEAM 教育を基盤としたコンピテンシー育成が必須であり、国の教育システムの中核として据えられるべきものです。日本が、世界に大きく価値貢献できるであろう科学技術を基盤にした価値創造立国を目指し、価値創造・価値貢献に優れたコンピテンシーを備えた人が、継続的に輩出されることを大いに期待したいと思います。

私共 PLIJ のこの表彰活動が、STEAM 教育に関する様々な優れた内容について、その功績をたたえ、広く紹介社会に紹介していくことは、この教育の意味合いの理解を深め、日本の教育基盤として浸透することは、極めて意義深いことです。今回、受賞された皆様方には、改めてその素晴らしい活動を称えと共に、応募いただいた方々にも感謝を申し上げ、更なる活発な活動を期待したいと思います。更に、広く STEAM 教育に関わる方々が引き続き連携を深め、それぞれの活動の深耕、継続を強化していただき、日本を支える STEAM 教育システムの構築にご貢献くださいますようお願い申し上げます。



都立国立高等学校有志による記念演奏

■野依良治博士お祝いの言葉



野依 良治 様

まず、浦嶋理事長が創設された PLIJ が着実に発展し、今回表彰された皆様の活躍によって支えられていることに心よりお祝いを申し上げます。

私は、人の人生に同じものではなく、多くの偶然とわずかな必然によって形づくられると考えています。人生は思い通りには進みませんが、自分の好きなことを信じて歩むことが大切です。戦後間もない神戸で育った私は、小学生の頃に湯川秀樹先生のノーベル賞受賞を知り、科学への憧れを抱きました。さらに中学生の時、化学技術者であった父に連れられて訪れたナイロン製品の発表会で、石炭や水、空気から新しい素材が生み出されることを知り、化学の力に強い感銘を受けました。これが化学を志した原点です。

父は国産技術による日本の復興を信じており、その影響で私は京都大学工学部へ進学しました。当初は博士号取得後に産業界で働くことを希望していましたが、修士課程修了時に大学へ残ることとなり、思い描いた進路とは異なる道を歩むことになりました。しかし、その後の研究成果が評価されて名古屋大学へ移り、右手系と左手系の分子を識別する触媒反応の研究によって国際的な評価を得ることができました。その結果、若い頃に抱いた化学工業への貢献という夢も別の形で実現することができました。

私が研究者として成長できた背景には、両親や先生方の支え、友人との交流、自由な研究環境がありました。また、30歳でのアメリカ留学では異文化から刺激を受け、多くの仲間を得ました。さらに、日本文化の中で培われた感覚や経験は、欧米とは異なる発想を生み出す力になったと感じています。

人生に幸運を得る方程式はありません。しかし、自分を信じ、知識だけでなく実体験を積みながら前向きに歩み続けることが大切です。私はかつて「シンクグローバリー、アクトローカリー」と語ってきましたが、人生を振り返ると「シンクローカリー、アクトグローバリー」もまた大切な生き方だと思います。志高く挑戦を続ける皆様の今後のご活躍を心より祈念いたします。改めまして、このたびの受賞、誠にありがとうございました。

秋田県立新屋高等学校および協力機関 新屋高校 SSC (SDGs × STEAM × Career) プロジェクト

活動概要

「新屋高校 SSC (SDGs × STEAM × Career) プロジェクト」は、3 分野を組みあわせ、VUCA 時代に活躍できる「論理的思考力」「提案力」「問題解決能力」に富む人材を育成する探究型キャリア教育プロジェクトである。特色ある取組みとして、1 年生各クラスが模擬会社を設立し試行錯誤しながら経営に取り組む起業体験プログラムと実際に法人登録した「合同会社あらこう」における企業内起業実践がある。具体的には、アントレプレナーシップ教育として、「合同会社あらこう」を設立し、海洋ゴミの有効利用によるアクセサリ開発など SDGs や地域貢献活動とリンクさせたビジネスなどがあげられる。これらの活動は、秋田県「環境大賞（学校教育部門）」・「キャリア教育推進優良学校 文部科学大臣表彰」につながるなど、高い評価を受けている。

本プロジェクトの新規性・独自性は、これがコンセプトだけの一時的な事業ではなく、学校教育全体に組み込まれていることにある。すなわち、1) 3 年間での体系的・段階的な探究フォーマット、2) 企業をベースにした実践的な体験、3) それを支える教員の育成・評価システム、などである。

地元投資家の厳しい評価を受けながら、社会の仕組みやルールを学び、「つまずき」や「挫折」を味わせ、「責任ある意思決定」を体験させることは、本気の探究活動となっている。

協力機関：秋田県教育委員会、三菱みらい育成財団、東京大学、大正大学、新潟医療福祉大学などの大学、地域の起業家、県内外の企業



会社設立会の様子

受賞者代表からのコメント

このたびは、第 2 回 PLI STEAM・探究グランプリにおいてこのような栄誉ある賞をいただき、大変光栄に感じるとともに、心より嬉しく思っております。今回の受賞は、本校の教育活動に真摯に向き合い、日々挑戦を重ねてきた生徒たちの努力の積み重ねが評価された結果であり、学校全体として大きな励みとなっています。

本校では令和 5 年度よりデジタル探究コースを設置し、アントレプレナーシップ教育を軸とした学びを推進してまいりました。起業体験プログラムの実施や「合同会社あらこう」の設立など、生徒が実社会と関わりながら主体的に挑戦できる環境づくりに取り組んでいます。活動の中では、思い通りにいかないことや失敗する場面も数多くありますが、本校ではそうした経験を否定的に捉えるのではなく、次の挑戦につながる大切な学びとして位置付けています。失敗を恐れずに挑戦するマインドの育成に力を注いできたことで、生徒たちが以前よりも自分の考えを発信し、仲間と協働しながら主体的に行動する姿が増えてきました。探究活動を通して、生徒の内面に変化と成長が生まれていることを実感しています。

こうした挑戦を続けることができてるのは、日頃から本校を支えてくださる地域の皆様、関係団体、そして多くの関係者の皆様のお力添えがあってこそです。心より感謝申し上げます。今後も「本気で挑戦し続ける新屋高校」を目指し、探究的な視点を大切にしながら、生徒一人ひとりの可能性を広げる教育活動を展開してまいります。そして、生徒たちが地域や社会とつながりながら、自ら未来を切り拓いていけるよう、これからも挑戦を続けてまいります。



東京 巣鴨での販売会

愛媛大学「四国型次世代科学技術チャレンジプログラム」実行委員会および協力機関 四国型次世代科学技術チャレンジプログラム

活動概要

四国の国立大学 5 大学が連携し、四国四県の教育委員会が県域を超えて協力し、四国の企業が参画するエコシステムの形成により、四国全域の高校生に対する科学技術分野の探究機会を提供するシステムである。このシステムの中核を愛媛大学の理、工、農、社会共創、教、医の学部教員で構成する実行委員会が担っている。人口減少時代を迎えて、四国の地域社会や地域経済の発展にとって有効なエコシステムと考えられ、他地域のロールモデルとして水平展開を期待できる。

具体的なプログラムは、高校生を対象に、科学的基礎を養う「基盤学習」（通常 200 名以上）→専門性を高める「展開学習」（40 名）→大学の研究室での本格研究「発展学習・課題研究」（15 名）と 3 段階のプログラムとなっている。

目指すところは、地域の課題解決とグローバルな視点を融合した「グローバルフロンティアリーダー」の育成であり、「科学アントレプレナーシップ」「科学的探究力」「異文化適応能力」を体系的に育成するプログラムを開発している。その結果、論理的思考力や課題設定能力、リーダーシップなどの向上が見られたとの自己評価であった。数字で追うと〇応募者数では、令和 5 年度 244 名、令和 6 年度 412 名、令和 7 年度 278 名と推移しており、〇理系学部への進学は 75% 以上と一定の成果を収めている。〇女子比率は、応募時 1 対 1 であるが、2 回の選抜を経て女子生徒の比率が高くなる傾向である。

協力機関：四国 5 国立大学教育連携委員会、松山大学、岡谷理科大学、4 県の教育委員会、地域企業等

本事業のこれまでの取り組み「愛媛モデル」を模した四国独自の高大連携事業「四国モデル」の立ち上げ



「愛媛モデル」から「四国モデル」へ広がる広域連携型人材育成

受賞者代表からのコメント



このたびの表彰は、愛媛大学「四国型次世代科学技術チャレンジプログラム」実行委員会だけでなく、四国 5 国立大学、四国 4 県の教育委員会、連携大学、研究機関、地域企業の皆様とともに積み重ねてきた取組を評価いただいたものと受け止めております。関係者を代表して、心より感謝申し上げます。

本プログラムでは、高校生が大学の学びや研究に早い段階から触れ、自ら問いを立て、仲間や専門家と議論しながら探究を深める機会を提供してきました。四国には、地域課題と世界の課題を結び付けて考えることのできる豊かな学びのフィールドがあります。私たちは、地域に根ざしながらも広い視野をもつ次世代の科学技術人材を育てることが、これからの四国の未来を支える力になると考えています。

今後も、受講生一人ひとりの挑戦を丁寧に支え、大学・学校・地域・企業が一体となった持続的な人材育成の仕組みを発展させてまいります。



本プログラム受講生による課題研究計画発表会の様子

大阪大学および協力機関 高校生向け STEAM 教育「SEEDS プログラム」

活動概要

大阪大学では、高校生の科学に対する好奇心の芽を芽吹かせ、大きく育てることを目標として「SEEDS（Science and engineering Enhanced Education for Distinguished Students）プログラム」を2015年度より全学をあげて推進している。

本プログラムは、高校生に対して高度な学術体験を提供する企画であり、主に理科系分野に興味を持つ高校生を対象に、最先端の研究施設や文科系をも含む大学の教育研究リソースを活用した文理融合・分野横断型の実験や講義を通じて、学びや研究の魅力を体感させる、まさに STEAM 教育の実践の場となっている。現在、700 名近い応募があるが、プログラムは定員 130 名のファーストステップと、そこから選抜され、研究室での個人研究が中心となる定員約 20 名のセカンドステップの 2 段階構成となっている。

これらの取組みの結果、受講生の満足度は非常に高く、また、国際会議、国内学会での多数の発表（計 76 件）、ならびに科学オリンピックなどのコンテストにも積極的に参加（計 69 件）して上位入賞の実績も多い。

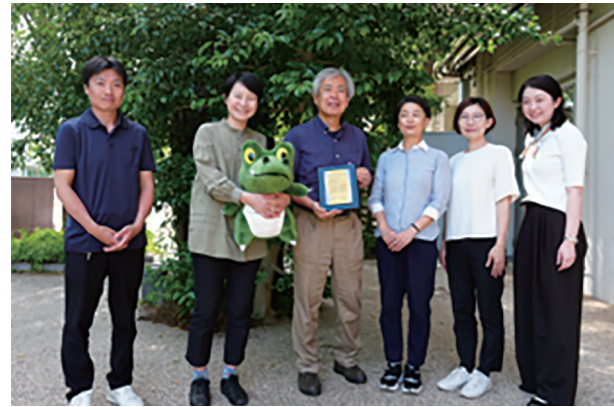
社会連携としては企業が学内に展開している協働研究所・共同研究講座における研究開発に触れるなど大阪大学の産学連携活動が活用されている。また、年間 100 名以上の教員と留学生を含む延べ 500 名以上の学部・大学院生の協力など大学の様々なリソースが活用され、全学体制で推進していることも大きな特徴であり、受講生に大変充実した学びの環境が提供されている。

協力機関：三菱みらい育成財団、大阪科学技術センター、加速キッチン、大阪市立科学館、大阪教育大学など



開校式での集合写真

受賞者代表からのコメント



この度は、このような栄誉ある賞をいただき、本プログラムに関わる全ての皆様とともに、心より御礼申し上げます。

大学の最先端研究と高校生の純粋な探究心が会おうとき、そこには教科書では得られない本物の驚きと発見が生まれます。SEEDS はその瞬間を高校生に届けたいという思いから始まり、10 年以上をかけて大阪大学全学の協力のもとで育ってきたプログラムです。

本プログラムを通じて、高校生が本物の研究に触れ、目を輝かせながら成長していく姿は、関わる全員にとって大きな喜びであり、推進の原動力です。大学の研究環境を直接開くことで高校生の知的好奇心に火を着け、それを絶やさず育てていくこと—それが SEEDS の目指す姿だと考えています。

今回の受賞を励みに、一人でも多くの高校生が科学の面白さに出会い、未来を切り拓く力を育めるよう、これからも取組を続けてまいります。



体感科学研究の風景

加賀市教育委員会および協力機関 加賀小中一貫型 STEAM プログラム

活動概要

加賀市教育委員会は、2017 年に全国に先駆けて小学校からのプログラミング教育を導入し、2024 年にその積み重ねを元に、市内 22 校で小学校 1 年生から中学 3 年生までを一貫してつなぐ 9 年一貫の加賀 STEAM プログラムを整備した。

具体的にはビジュアルプログラミング「Viscuit」を用いた「プログラミングは簡単で楽しい」と感じられる授業、「Scratch」を使った表現力と論理的思考を養う授業、マイコンボード「micro:bit」でセンサーやモーターを制御したり、映像制作、Web コンテンツ制作等に挑戦し、テクノロジーで課題を解決する探究活動を行う授業を展開している。さらに、小学 6 年生や中学 2,3 年生を中心にはこれらの学びの積み重ねを活かし、各校が独自のテーマでプロジェクト学習を実施している。また、教育委員会が学校と支援企業をつなぎ、授業案や教材の共創を行っている。現在までに小中一貫型 STEAM プログラムは延べ約 8,000 人、プログラミング教育を含めると約 22,000 人が学んできた。

加えて、STEAM の学びの祭典として「KAGA STEAM FES（KAGA STEAM Presentation）」を 2022 年から毎年開催している（延べ約 1,500 人参加）。市内の全小中学校、保護者、地域住民が参加し、学校を超えて学びを共有できるとともに、地域全体が STEAM の学びを応援する文化を醸成している。

協力機関：加賀市立小学校、中学校、義務教育学校（計 22 校）、（株）インテトラス、（株）steAm



「micro:bit」を使った学びの姿

受賞者代表からのコメント

この度は、栄えある賞を頂戴し、また加賀市の取組を是国にご紹介する機会をいただきまして、誠にありがとうございます。

加賀市では、「そろえる教育」から「伸ばす教育」への転換に向けて長年にわたって各種の挑戦を続けてきています。その中で、2024 年度から実施している本プログラムは、「半径 5 メートルの世界でも何かを変えた、変えられるかもと思える経験」「テクノロジーの進化などが自分ごとになる感覚」を育むことを目指し、教科等の学びを結集して、課題解決・探究型の学びを実践しているものです。子ども一人一人の姿に合わせて、毎年試行錯誤を続けている最中ではありますが、今回の受賞が、市内で STEAM の学びに取り組むメンバーの励みになるとともに、市外における実践の更なる発展に少しでも寄与することができれば大変幸いです。

2026 年度からの新教育ビジョンでは「BE THE PLAYER 自分で考え 動く 生み出す そして世界を変える」を合言葉として、子どもたちが自分自身の「好き」「全力」「やってみよう」を感じる瞬間を通じて、生涯にわたって自ら学ぶ人材を育成すること、氾濫する情報に流されないためのスキル・モラル・リテラシーを育むこと等としています。今回の受賞を弾みとして、引き続き、学校内外の多くの関係者の力を結集して子どもたちのワクワクと課題発見・解決力を更に育むとともに、幼児教育・保育や、高校教育における探究的な学びとの接続を図ってまいります。



KAGA STEAM FES の様子

鹿児島県立市来農芸高等学校および協力機関 昆虫×STEAMで挑む地域課題解決

活動概要

地元水産業者からの相談に端を発し、地域課題の解決を様々なステークホルダーの協力を得ながら、科学／技術／工学／芸術・創造／数学を総動員して目指すまさにSTEAMである。

価格が高騰した魚粉の代替として、学校で飼育しているコオロギを飼料として使おうというものであるが、コオロギの飼料には地域の農産副産物を使用、発酵熱は飼育の保温に使用、地元IT企業と協働で飼育施設を設置するなど、社会実装と地域資源循環のモデル構築を目指し、年々工夫を重ねている。東京大学から助言を受けたコオロギ飼育方法の改善、熊本大学薬学部と共同での成分分析、地元IT企業と共同開発した生育記録アプリによるデータ管理の効率化、(株)ヒガシマル研究部の指導を受けた実証試験など、専門家の知見を上手に取り入れている。

農業高校という特徴を存分に活かした優れた探究活動であるが、それに留まらず、毎年生徒が自主研究同好会に入部し、技術や課題を引き継ぐ体制を整えていることにより、活動は6年以上継続、年度毎に継続的な改善が行われている。更には、研究成果を広く発信するため、SNSや動画配信を実施、各賞への応募と受賞を通し、地域・企業・行政・海外高校との接点を増やし、研究の社会的基盤を広げている。

協力機関：東京大学、熊本大学薬学部、カリフォルニア州サリナス高校、(株)ヒガシマル、地元IT企業、さつまどり保存会、地元水産業関係者など



地元水産業者での実証試験

受賞者代表からのコメント



この度は栄えある賞をいただき、誠にありがとうございます。私たちの活動は、地元の養殖業者の方々から「魚粉価格の高騰により経営が厳しい」というご相談をきっかけに始まりました。コオロギを活用した持続可能な地域循環型飼料の開発を目指し、公的な資金支援を受けることなく、生徒一人ひとりが知恵と情熱を注ぎ、6年以上にわたって粘り強く取り組んでまいりました。この研究がこのような形で高く評価されたことを大変光栄に思うとともに、これからの大きな励みをいただいております。東京大学、熊本大学薬学部、地元IT企業、ヒガシマル株式会社はじめ、多くの皆様のご指導とご支援があってこそ、ここまで歩んでくることができました。改めて心より感謝申し上げます。この受賞は、共に汗を流してきた生徒たちと、温かく支えてくださった地域の全ての皆様への大きな贈り物でもあります。今後もクマザサ飼料の成分分析やヒラメを用いた実証試験を継続し、地域資源を活かした持続可能な循環型農業の実現に向け、生徒・教員・地域が一丸となって邁進してまいります。



海外の高校生とのワークショップ

千葉大学および協力機関 デザイン思考を取り入れたSTEAM教育による次世代人材養成

活動概要

大学の教育・研究資源を活用し、中高生に研究の実体験にデザイン思考を取り入れた課題解決型探究を行う機会を提供するプログラムである。千葉大学は国立大学として初めて体系的にデザイン教育を開始し、100年以上の歴史を有しており、この基盤をもとに、中高生を対象にデザイン思考を育むSTEAM教育プログラムを開発、「出る杭」研究人材養成に取り組んできている。2008年の開始以来、毎年度100名以上の生徒がエントリーし、これまでに6,000人以上が参加、継続的に参加規模の拡大と内容の高度化を進めている。千葉大学学内だけでも次世代才能支援室、国際未来教育基幹、先進科学センター、教育学部、医学部、工学部、理学部、園芸学部、等々多様な部門が連携しているところがまさにSTEAMとなっており、更には教育委員会だけでなく、経済同友会・鹿島建設などの産業界、理化学研究所やかずさDNA研究所などの研究機関、チュラロンコン大学他18大学の在外教育機関など、連携の幅は多様である。内容言語統合型学習(CLIL)の考え方を導入した科学実験を英語で学ぶ講座の開発、飛び入学の理念を応用した「飛び選抜」の実施、高校教員を対象に探究指導力を強化する講座の開催、高校生をアジアの大学の研究室に派遣し、現地の大学教員や大学院生の指導のもと研究活動ができるグローバルなプログラムなどに特徴がある。受講生は国際学術誌や国内外の学会・国際科学オリンピックなどで高いレベルの成果をあげており、また、修了生は海外の大学で学んでいる者も多い。

協力機関：経済同友会、鹿島建設(株)、(株)トリプルアイズ、他多数



国際研究発表会・SDGsワークショップ

受賞者代表からのコメント



この度は大変名誉ある賞を賜り、心より御礼申し上げます。千葉大学では長年にわたり、日本のみならず東南アジアを中心とするアジアの若者に、最先端の科学に触れる教育機会を提供してまいりました。その出発点は、科学・技術文化を通じた日本の再発見でした。まず全学的な実施体制のもと国内の中高生を対象とした研究支援プログラムを立ち上げました。この成果を基に海外へ展開し、各国の大学と連携し科学教育の普及を進めてきました。現在では9か国19大学が参加するネットワークへと成長し、この仕組みを活用して協力大学は各国のSTEAM教育拠点となっています。すでに多くの参加者が社会で活躍しており、各国で大学教員となった卒業生もおります。彼らは次代を担う若者を育てるとともに、本活動の力強い協力者として国際的な教育ネットワークを支えています。このつながりが国境を越えて世界を結び、豊かで持続可能な社会の実現に貢献していることを実感しています。今後も皆様のご支援を賜りながら、未来を創造する人材の育成に全力で取り組んでまいります。



実験講座「魚のタンパク質解析実験」
分析から科学コミュニケーションを学ぶ

東京大学大学院情報学環開沼博研究室および協力機関 問う力を磨き実践する探究プログラム「福島学カレッジ」

活動概要

受賞者が主導する「福島学カレッジ」は、震災・原子力災害の記録・記憶と課題を探究の起点とする合宿型・実践型の探究学習・STEAM 教育プログラムである。具体的には、全国の中高生が複数回の合宿で研究者やプロアーティストの伴走を受け、問いを立てて調査・分析・表現を行い、学会発表や作品展示を通じて社会に成果を発信するもので、選択制の「研究コース」では大学院レベルの探究を実践し、「表現コース」では芸術の手法で福島を捉え直した上で、それぞれに不定期なフィールドワークを組み込むことにより新たな知、批判的思考を育成する。現在までコース生 86 名、活動には 200 名以上が参加し、NHK や新聞で成果が取り上げられるなど社会的評価も高い。修了者は伝承館ユース研究員・クリエイターとして地域で継続的に活動する他、探究学習プログラム開発は大学・行政・地域との連携を広げつつ「for Fukushima」から「from Fukushima」へと拡大し、地域発の学びを全国へ展開する先端的モデルとして、防災教育や STEAM 教育の新たな可能性を提示している。

本プログラムは、一般的な学習を超えた高度な探究・表現を提供している点を高く評価された。また、大学・研究者・アーティストが伴走し、かつ生徒から気づきを得る新しい教育モデルでもあり、STEAM の「A」を具現化し社会実装型の探究を提示していること、成果が社会的に認知されていること、修了者が TA として循環的に関わる継続性等が素晴らしく、全国展開にも期待したい。協力機関：福島国際研究開発機構、東日本大震災・原子力災害伝承館



表現コースでの取組の一部

受賞者代表からのコメント

この度は、素晴らしい賞をいただき、心より感謝申し上げます。他にも様々に取り組みをされている方々もいる東京大学関係者・福島県関係団体としてはじめての受賞という栄誉を賜り、大変光栄に存じます。

「福島学カレッジ」は、東日本大震災・原子力災害という、極めて重層的で複雑な課題を抱える福島を舞台としています。ここで、全国の中高生たちが研究者やアーティストと伴走しながら、自ら問いを立て、フィールドワークやデータ分析を通じ、社会と対峙する実践を重ねてきました。

今回の受賞は、本プログラムの趣旨にご賛同くださり、多大なるご協力をいただいた東日本大震災・原子力災害伝承館、福島国際研究機構の皆様、そして何より、困難な問いと向き合い、挑戦し続けてきた中高生一人ひとりのためまめ努力の賜物です。

「問いを立てる力」を育み、主体的・対話的で個別最適な学びを実践する本モデルを知った他地域の探究・STEAM 関係者からは様々なお声がけを頂いており、いまでは全国の教育委員会・学校等に関わる機会を頂くようになっております。これからの教育において不可欠な視座を提供するものと評価いただきはじめているものと自負しております。今回の受賞を大きな励みとし、この成果をこれまで以上に全国に展開していく所存です。「地域×大学×若者」が協働する新しい学びのプラットフォームを深化させ、探究学習と STEAM 教育の未来を切り拓いていけるよう、今後も一層精進してまいります。この度は誠にありがとうございました。



積極的なフィールドワーク

日鉄エンジニアリング株式会社および協力機関 エンジニアリング教育プログラム 情熱・先端 Mission-E

活動概要

日鉄エンジニアリング株式会社は、株式会社リバネスと共同で、中高生を対象としたエンジニアリング教育プログラム「情熱・先端 Mission-E」を展開している。学校で学ぶ数学・物理・化学などに加え、工学・美術・社会・環境などの STEAM 領域を統合し、「現実的な社会課題」に挑むことで、探求力、想像力、問題解決力などを養う実践的な学びの場を提供している。

現役エンジニアがアドバイザーとなり、約 8 カ月間にわたり生徒の試行錯誤に伴走するのが最大の特徴である。具体的には、関東と北九州を拠点に、①浮体式洋上風力発電設備の設計・製作、②大空間構造物の設計・製作、③工場廃熱利用モデルの設計・製作のテーマでプロジェクトを実施し、生徒がチームで協働し実際に手を動かして実機モデルを製作し、その実機の性能とプレゼンテーションの内容をコンテストで競うプログラムである。

2015 年の開始から 10 年を経て、これまでの参加校は延べ 83 校、参加生徒数は 586 名に達している。参加者の多くが後に理工系の大学・大学院へ進学するなど次世代の技術者育成に直結しており、教育現場からも高く評価されている。

特筆すべき点は、節目のイベントに社長、役員や社員エンジニアも参加して、プログラムに参加している中高生や先生、審査員との交流を続け、CSR、CSV に留まらない、企業認知度・好感度、社員エンゲージメントといった企業側のインセンティブもを創出し続けてきたことにある。

協力機関：(株)リバネス、日本大学、九州大学、北九州市



廃熱利用実証実験（北九州）

受賞者代表からのコメント

本取組みに対し、栄えある評価をいただき、心より御礼申し上げます。

当社は、社会貢献活動の重点分野の一つに「次世代育成」を掲げ、未来を担う中高生が、「情熱・先端」をテーマとする本プログラムを通じて、エンジニアリングの考え方やものづくりの面白さに触れ、挑戦する機会づくりを進めてまいりました。

正解が一つではない課題に向き合い、仲間との協働の中で仮説を立て、議論と試行錯誤を重ねながら解を探るプロセスを重視しています。思い通りにいかない経験も含め、自ら考え、手を動かし、チームで乗り越えていくことが、このプログラムならではの学びにつながっていると考えています。こうした経験は、生徒一人ひとりの主体性や協働性を育むとともに、将来にわたり活かされる力へとつながります。

また、これまで延べ 79 名のエンジニアがアドバイザーとして生徒の皆さんの挑戦に伴走してきました。生徒にとっては社会とつながる課題に触れながら学びを深める機会となり、関わった社員にとっても、若い世代との対話を通じて、学ぶ姿勢の大切さに気づき、エンジニアリングの面白さを改めて実感する機会となっています。近年では、本プログラムを経験した修了生が活動に加わり、生徒たちに自身の進路や研究、時には活動の中で得た経験を共有する機会も生まれています。

今回の受賞を励みとし、関係者の皆さまとともに、若い世代の学びと挑戦がつながっていく場を丁寧に育ててまいります。



空間構造物耐荷重試験（関東）

広島県立祇園北高等学校および協力機関 「好き」から始まり、「好き」を学び、「好き」を究める探究活動

活動概要

祇園北高校は令和7年度で創立43年目を迎える地域を代表する公立進学校である。同校の特徴は、創立以来一貫して「文武両道」を校是としてきたことで、特に運動部の活躍は目覚ましく、インターハイ出場経験のある陸上部、県大会で準優勝経験のある野球部、全国大会出場経験のあるバレーボール部などは、広島県内でも評判が高い。「精神論ではない、実践論としての文武両道を確立することは、今後の公立高校の生き残りを考える上で重要な視点だと思います。そこで、平成15年度に学校経営計画を作成する際に、本校は根本理念として『文武一貫』というテーマを掲げました。文武両道を更に一歩進め、学習と部活動の一体化を図ろうというわけです。」と同校の当時の校長の言。

生徒の好きな部活動（武）の実践と教室内でデータサイエンスの学び（文）を結合させ、探究の結果を部活動に生かす往還システムである。近年、スポーツへのデータサイエンスの進展は目覚ましいが、同校の伝統である「武」に先ごろから指定されている「DXハイスクール事業」が推進力を発揮している。個人探究はテーマが多様な分野に及び、担当する教員（教員一人当たり20名）には生徒とともに学ぶというスタンスで、要所要所で外部の組織との連携による専門家の講演会設営に力を入れている。また、生徒は積極的に学外活動に参画しており、連携や発表を通して成果を上げ、受賞する生徒も存在する。

協力機関：広島市立大学などの近隣学校・広島県ドローン協会やサンフレッチェ広島などの専門機関



アナリスト講演会の様子

受賞者代表からのコメント



高校現場は「デジタル化」「探究活動の重要性」「教員の働き方改革」「部活動の在り方」など、大きな変化の時代にあります。しかし、この“変化”を負荷として蓄積していくのではなく、不易流行・温故知新の考え方で運動・効率化を図っていくことが現場に求められているミッションだと捉え、本校のプログラムを構築してきました。本校生徒は、部活動が高校生活や進学先決定に対して占める割合が非常に高く、生徒の興味・関心もそこにあるということに繋がります。その興味・関心を、「学び」につなげることが教育の鍵になってくると考えています。運動部だけでなく、文化系の活動もちろん、探究の授業の中で「学び」に変えることができるようプログラムの改善を進めています。そうした取組の積み重ねが、本校にとって「学びのイノベーション・プラットフォーム」になると確信しており、このたびのグランプリ受賞は非常に励みとなりました。今後も不易流行・温故知新の精神を大切にしながら、本校の活動をさらに発展させていきたいと考えています。



地域でのVR体験会の様子

宮城県仙台第三高等学校および協力機関 産学官連携により探究の深化を目指す「三高型 STEAM 教育」

活動概要

「三高型 STEAM 教育」とは、すべての授業で課題解決型学習（PBL）を取り入れ、授業での課題設定・課題解決の取り組みが探究活動で活かせるように工夫した教育プログラムである。数学と情報を融合した「SS データサイエンス」、家庭と保健を融合した「STEAM ライフサイエンス」、英語と理数探究を融合した「Research Expression」など STEAM の A の領域も取り入れることで、幅広い視点で物事を捉え、複雑な社会問題に対する探究とその解決を中心に据えた学びを展開している。

「三高型 STEAM 教育」の柱となる科学的な探究活動を支える場として「尚志ヶ丘フィールド」を設定し、地域資源を「地域コミュニティ」「産学官」「国際・国内交流」「地域小学校・中学校交流」「研究発表」の5分野に分類し、授業や課外活動で数多くの組織との産学官連携を通して、本物の体験を実現し、探究的な学びを深化させている。

産学官連携と「三高型 STEAM 教育」で培った多角的で多面的な見方・考え方を活かした探究活動では、生徒主体のテーマ設定により、毎年100を超えるテーマと外部発表（R6年度のべ383名）を通してイノベティブな生徒を育成している。探究活動をベースとする幅広い教育プログラムと豊富な連携による高いレベルの模範的な取り組みである。

協力機関：文部科学省、宮城県、仙台市他官公庁、まるとつるがや他地域団体、仙台市鶴ヶ谷市民センター他行政機関、花王、東京エレクトロン、藤崎他企業、東北大学、宮城大学、山形大学他大学、小学校、中学校、高等学校、国立台湾師範大学附属高級中学他海外校など



三高型 STEAM 教育の実践例

受賞者代表からのコメント



この度は、グランプリおよび朝日新聞社賞で本校の取組を評価いただき大変光栄です。

AI や IoT などの急速な技術の進展により社会が激しく変化し、多様な課題が生じている今日、各教科等での学習を実社会での問題発見・解決に生かしていくための教科等横断的な学習が推進されています。「三高型 STEAM 教育」では、PBL を取り入れ、生徒の探究的な学びを実現すべく日々授業改善をしています。

産学官連携では、講演会や企業訪問、探究活動へのサポートを通して、生徒の学習の深化とともに、興味関心の拡大、キャリア意識の向上など多方面での教育効果を実感できるとても貴重な機会を得ることができました。

教員不足が問題になっている今、産学官連携により外部の力を借りながら生徒を支援する取組が、学校だけではできない大きな成果をあげています。産学官連携を支える全校体制の組織づくりを継続するとともに、産学官連携の取組事例を普及していきたいと思っています。



尚志ヶ丘フィールドの実践例

宮崎県立延岡高等学校および協力機関 地域協働による延高の未来創造人材の育成

活動概要

受賞者はSSH 指定を受け、全校生徒約 720 名を対象に体系的な探究学習を展開している。第Ⅰ期のⅠ年次には地域資源を活用した「SDGs フィールドワーク」、2 年次には普通科で「SDGs 課題研究」、メディカル・サイエンス科で「STI 課題研究」に取り組み、地域課題の解決を探究する。3 年間で通算 5 回の研究発表を経験し、最終的には全員が英語によるポスター発表を行う体制を整備。大学・企業・行政と連携し、毎年延べ 30 名以上の専門家がメンター等として参画するなど産学官協働を強化している。

校内には教育開発部を設置し、教員の負担軽減と持続的運営を実現している。国際連携にも注力しており、例を挙げるとタイの協定校との共同研究や英語発表を開催することで生徒の異文化理解を深化させている。第Ⅱ期では「A-time」導入や英語教育との融合を進め、地域協働とグローバル視点を統合した独自の STEAM 教育モデルとして発展を続けている。

本プログラムでは、地域・大学・企業との連携を重視した体系的探究活動や全員による英語ポスター発表等が特徴的である。教員の意識変容や校内体制の整備・A-time 導入など、持続的運営への工夫も他の活動にとって良いモデルになるとと思われる。科学への関心喚起や工学系志望の増加、地域の教育ハブとしての役割、国際交流による科学コミュニケーション力の育成等の取組は特に注目すべき点である。

協力機関：宮崎大学、九州医療科学大学、地元企業（旭化成株式会社等）・地元団体、宮崎県総合博物館、宮崎県教育委員会、延岡市



のべたかサイエンスフェスタ

受賞者代表からのコメント



この度は栄誉ある賞をいただき心より光栄に存じます。本校は令和 2 年度のスーパーサイエンス (SSH 指定以来、「全校生徒が主役となる体系的な探究学習」を軸に、地域課題解決とグローバルな探究に取り組んでまいりました。年次を追うごとに研究を深化させ、最終的に「全員が英語でポスター発表を行う」という高い壁を乗り越え確かな科学コミュニケーション力を身につけていく生徒たちの姿は私たちの大きな誇りです。

この歩みは毎年延べ 30 名以上の大学・企業・行政の専門家の方々が寄り添ってくださる強力な「産学官協働」とタイの協定校をはじめとする国際連携があったからこそ今回の受賞に至ったと考えております。現在 SSHⅡ期を迎えた本校はⅠ期の成果を継承しつつ自主的活動を促す「A-time」の導入など新たな挑戦を始めています。今回の受賞を励みに地域の教育ハブとしての責任を強く認識し、地域協働とグローバル視点を統合した独自の「STEAM 教育モデル」を発展させ、未来を担う理系人材の育成に尽力してまいります。支えてくださったすべての関係者の皆様に、深く感謝申し上げます。



SciUS フォーラム 2024 (タイ) で銀賞、銅賞、好奇心賞を受賞

朝日放送テレビ株式会社 「Q-1~U-18 が未来を変える★研究発表 SHOW~」の制作と全国放映

活動概要

ABC テレビは、2022 年から、社のサステナブルな社会実現に向けた取り組みである「アスミライブプロジェクト」の一環として、この番組の制作・放映に取り組んできた。すなわち、若者たち (U-18) が自らの探究心に基づき、社会や世界の課題に対して、独自の視点から問い (Question) を立て、その答えを 9 分間のプレゼンテーションにまとめて発表する大会である。毎年参加人数は増加し、4 回目の 2025 年は、大阪・関西万博との連携のもと実施されたが、応募数は全国各地から 293 チームにまで伸びている。多様な審査・講評を U-18 の参加者にフィードバックすることを大事にしていると主催者側からの発表。探究の様子や大会の様子は番組化し、2025 年度は ABC テレビのみならず、テレビ朝日系 24 局ネットで放送・配信した。審査の基準として、「未来を、世界を変える探究であるかどうか」とし、2025 年大会では次の 4 項目がポイントとして公開されていた。

①「主体性」、②「着眼点」、③「論理性」、④「アウトリーチ力」
特別賞として、評価されたのは、若者の探究・STEAM の学びが、テレビの特性から茶の間に届き、世代を超えて浸透していくこと、すなわち、「探究の民主化」によって貴重な活動であること、賞の授与により、この活動がさらに多くの参加者へ広がり、スポンサーを勇気づけ、番組としての成長と継続性に好影響を与えることを見込んでのものである。

協力機関：番組スポンサー（東急不動産ほか 7 社）、後援団体（文科省、経産省等、近畿 6 府県教育委員会、大阪大学、賞品提供賛同企業多数）

受賞者のコメント

名誉ある素晴らしい賞をいただき、心より光栄に存じます。誠にありがとうございます！なぜ、大阪のテレビ局である私たちが「探究」をテーマにした番組を作るのか？不思議に思われるかもしれません。しかし、私たちの根底には、「熱闘甲子園」で高校球児たちの青春を追いかけ、「M-1 グランプリ」で人生を懸ける漫才師の姿に密着してきた DNA やスピリッツがあります。私たちは、何かにのめり込み、情熱を燃やしている人を応援せずにはいられないテレビ局なのです。AI が目覚ましく発達をする昨今、「自ら問いを立てる力」はますます重要になってきます。そして「探究の力」は、これからの時代を生き抜く子供たちにとって最強の武器になります。「虫が好き」「宇宙が好き」…Q-1 にエントリーしてくれる U-18 たちは、「好き」という純粋な衝動を原動力に、目をキラキラとさせ驚くべき熱量で社会や未知の世界と向き合っています。彼らの姿に触れるたび、私たちは「この子たちこそが未来を拓く希望だ」と確信させられます。彼らの情熱を、ドラマチックに描き、対等な目線で評価し、きちんと「すごい！」と称賛し、さらにそれを広くお茶の間や教育現場にまで届くよう演出してお届けすること。それが、放送局だからこそ果たせる社会的使命だと考えます。私たちは「Q-1」を、100 年続く「知の甲子園」へと育てていく覚悟です。このプロジェクト自体が、「どうすれば子供たちの目が輝くのか」「このワクワクがどんな未来に繋がるのか」を問い続ける、我々テレビマンの「探究活動」でもあります。2026 年大会も 7 月に決勝を迎え、今年もアツいアツい青春ドラマを全国ネットでお届けします。「日本の、世界のミライは明るい」。そう感じただけの番組をこれからも作り続けてまいります。

Q-1 U-18が未来を変える★研究発表 SHOW



鎌倉市教育委員会および協力機関
「鎌倉スクールコラボファンド」の取組

活動概要

鎌倉市が推進する「鎌倉スクールコラボファンド」は、急速に変化する社会に対応し、子どもたちの主体的な学びと未来を切り開く力を育成するため、教育委員会が中心となって学校と地域の人材・団体が連携する仕組みを構築し、財政面も支援する制度である。

リアルな社会課題に基づくプロジェクト型学習、ICTも活用した個別最適な学びなど新たな社会の要請に応えた教育の実現のためには、様々な知見や蓄積を持つ外部の組織との連携が非常に効果的だが、資金源がないため断念せざるをえない現実がある。この根本的な課題に対し、2020年の設立以来、ガバメントクラウドファンディング（GCF）を活用して資金を集め、鎌倉市の小中学校において、NPOや大学とコラボしたプロジェクト型学習やベンチャー企業とコラボした環境学習など多様な教育活動を展開している。資金面では、これまでにGCFを5回実施し、累計約4,148万円の寄附を達成している。2024年には「鎌倉スクールコラボファンド活用基金」を新設、さらに、信託銀行との連携で元本保証の資産運用益の活用、寄附型自販機の設置、本のリユースによる寄附プログラムの導入と様々な工夫が積み重ねられている。

この制度は資金提供にとどまらず、教育委員会が学校と地域団体のマッチング・コーディネートを担うことで、鎌倉市教育大綱に掲げる「学習者中心の学び」の具体化を図っている。外部の資源を活用しながら、学校が理想的な教育活動を継続できる仕組みとして、他自治体にも参考となるモデルである。

協力機関：NPO 法人未来をつかむスタディーズ、三井住友信託銀行 他



見つけて解決する探究学習

受賞者代表からのコメント



この度は、鎌倉市の取組を評価いただき、誠にありがとうございます。鎌倉スクールコラボファンドは「子どもも教師もワクワクする学びをつくろう」という思いから、教育委員会が学校と社会の間を結び、企業・大学・NPO等の知恵を教室に届ける仕組みとして始まりました。限られた学校予算だけでは実現しにくい学びも、ふるさと納税等を活用した地域社会の共助により、SDGs、福祉、国際交流、海の学びなど多様な探究的な学びが実現しています。これらの取組を通じて、教師たちも教育観が変容し、教育課程を編成する力も高まってきました。子どもたちが社会課題を遠い世界のことでなく「自分ごと」として捉え、自ら問い、対話し、行動する姿は、鎌倉の教育が目指す未来そのものです。地域の豊かな文化・歴史・自然を活用し、地域全体を学校として捉えるとともに、教職員、地域、企業、保護者と共に、社会に開かれた教育課程を磨いてまいります。

今回の受賞を励みに、すべての子どもが炭火のように生涯にわたって自ら学び続け、幸せになれるまち鎌倉を目指していきます。



IoT トングを使ったごみ拾いで
ごみの分布・種類を分析する環境学習

法人概要・会計報告

貸借対照表 2026年3月31日現在

(単位：円)			
科 目	当年度	前年度	増 減
Ⅰ 資産の部			
1. 流動資産			
現金預金	21,246,490	12,501,323	8,745,167
未収金	2,975,608	2,588,524	387,084
前払費用	105,000	0	105,000
流動資産合計	24,327,098	15,089,847	9,237,251
2. 固定資産			
その他固定資産	7,758,332	5,924,368	1,833,964
固定資産合計	7,758,332	5,924,368	1,833,964
資産合計	32,085,430	21,014,215	11,071,215
Ⅱ 負債の部			
1. 流動負債			
流動負債合計	9,867,342	9,409,083	458,259
負債合計	9,867,342	9,409,083	458,259
Ⅲ 正味財産の部			
1. 指定正味財産			
指定正味財産合計	0	0	0
2. 一般正味財産	22,218,088	11,605,132	10,612,956
正味財産合計	22,218,088	11,605,132	10,612,956
負債及び正味財産合計	32,085,430	21,014,215	11,071,215

正味財産増減計算書 2025年4月1日から2026年3月31日まで

(単位：円)			
科 目	今年度	前年度	増 減
Ⅰ 一般正味財産増減の部			
1. 経常増減の部			
(1) 経常収益			
受取会費	36,640,000	35,938,000	702,000
その他経常収益	8,069,821	8,069,821	7,899,819
経常収益計	44,007,821	44,007,821	8,601,819
(2) 経常費用			
事業費	25,819,254	29,527,203	△ 3,707,949
事業費（人件費以外）	13,530,759	15,851,620	△ 2,320,861
人件費	12,288,495	13,675,583	△ 1,387,088
管理費	16,177,430	14,164,890	2,012,540
管理費（人件費以外）	8,877,553	7,947,666	929,887
人件費	7,299,877	6,217,224	1,082,653
経常費用計	41,996,684	43,692,093	△ 1,695,409
2. 経常外増減の部			
(1) 経常外収益	0	0	0
(2) 経常外費用	0	0	0
当期一般正味財産増減額	10,612,956	315,728	10,297,228
一般正味財産期首残高	11,605,132	11,289,404	315,728
一般正味財産期末残高	22,218,088	11,605,132	10,612,956
Ⅱ 指定正味財産増減の部	0	0	0
Ⅲ 正味財産期末残高	22,218,088	11,605,132	10,612,956

法人概要 役員・顧問・委員

PLIJ 役員			
理事	理事長	浦嶋 将年	
	専務理事	田中 幸二	元株式会社日立製作所副社長
	理事	江村 克己	福島国際研究教育機構理事
		折笠 光子	元日鉄エンジニアリング株式会社営業統括部長
		佐田 豊	株式会社東芝上席常務執行役員
		島田 啓一郎	元ソニー株式会社執行役員
		清水 喬雄	元 JSR 株式会社取締役上席執行役員
		鈴木 宏治	東京都立立川高等学校統括校長
		田中 敏宏	大阪大学統括理事・副学長
		年吉 洋	東京大学生産技術研究所長
		中島 さち子	株式会社 steAm 代表取締役社長
		中西 淳二	(一社) 学びのイノベーション・プラットフォーム企画・管理部長
		福田 加奈子	住友化学株式会社顧問
監事	吉田 裕明	元住友化学株式会社監査役	

PLIJ 顧問			
顧問	遠藤 信博	日本経済団体連合会副会長、日本電気株式会社特別顧問	
	金出 武雄	カーネギーメロン大学創始者記念全学教授	
	熊ノ郷 淳	大阪大学総長	
	坂本 雅彦	全国都道府県教育委員会連合会会長・東京都教育委員会教育長	
	佐藤 康博	株式会社みずほフィナンシャルグループ特別顧問	
	野依 良治	名古屋大学特別教授	
	藤井 輝夫	東京大学総長	
	モンテ・カセム	公立大学法人国際教養大学理事長兼学長	
	吉田 晋	日本私立中学高等学校連合会会長、富士見丘学園理事長・校長	

法人概要				
所 在 地	東京都目黒区駒場 4-6-1		事 業 内 容	STEAM 教育の振興に係る事業実施
	東京大学生産技術研究所内			
設 立 日	2021 年 9 月 6 日		お問い合わせ先	info@plij.or.jp
正 会 員	39		特 別 会 員	464

法人概要 正会員・特別会員

正会員 (企業会員) 39	2026 年 7 月 1 日現在
-----------------	------------------

(株) IHI	千代田化工建設 (株)
(株) アシックス	東京エレクトロン (株)
(株) INPEX	東京電力ホールディングス (株)
鹿島建設 (株)	(株) 東芝
(株) 関電工	(株) 図書館流通センター
三機工業 (株)	(株) ニコン
JX 金属 (株)	日揮ホールディングス (株)
JFE スチール (株)	日鉄エンジニアリング (株)
(株) JTB	日本製鉄 (株)
(株) 島津製作所	日本電気 (株)
清水建設 (株)	(株) 日立製作所
住友化学 (株)	富士通 (株)
住友電気工業 (株)	(株) 堀場製作所
全日本空輸 (株)	丸善雄松堂 (株)
ソニーグループ (株)	三菱ケミカル (株)
第一三共 (株)	三菱ケミカルエンジニアリング (株)
大日本印刷 (株)	三菱地所 (株)
太陽誘電 (株)	三菱商事 (株)
(株) 大和証券グループ本社	三菱電機 (株)
(株) 竹中工務店	

特別会員 464 (その 1)	2026 年 7 月 1 日現在
-------------------	------------------

【中学校】 (2)	佐野日本大学高等学校	東京都立立川高等学校
信州大学教育学部附属長野中学校	白鷗大学足利高等学校	東京都立戸山高等学校
信州大学教育学部附属松本中学校	群馬県立桐生高等学校	東京都立西高等学校
【高等学校】 (270)	群馬県立高崎高等学校	東京都立白鷗高等学校
札幌光星高等学校	群馬県立藤岡中央高等学校	東京都立日比谷高等学校
札幌日本大学高等学校	群馬県立前橋高等学校	東京都立富士森高等学校
北星学園女子中学高等学校	群馬県立前橋東高等学校	東京都立南多摩中等教育学校
立命館慶祥高等学校	樹徳高等学校	東京都立武蔵高等学校・附属中学校
青森県立青森高等学校	埼玉県立浦和第一女子高等学校	東京都立両国高等学校・附属中学校
青森県立八戸高等学校	埼玉県立大宮工業高等学校	千代田区立九段中等教育学校
岩手県立黒沢尻北高等学校	埼玉県立川越女子高等学校	大妻高等学校
盛岡市立高等学校	埼玉県立所沢北高等学校	錦城高等学校
宮城県仙台第三高等学校	淑徳与野高等学校	品川女子学院高等部
仙台市立仙台青陵中等教育学校	星野高等学校	渋谷教育学園渋谷中学高等学校
聖ウルスラ学院英智高等学校	立教新座中学校・高等学校	自由ヶ丘学園高等学校
秋田県立新屋高等学校	千葉県立東葛飾高等学校	城北中学校・高等学校
秋田県立大館鳳鳴高等学校	千葉県立葉園台高等学校	頌栄女子学院高等学校
山形県立東桜学館高等学校	千葉市立千葉高等学校	昭和女子大学附属昭和中学校・高等学校
山形県立山形東高等学校	市川高等学校	瀧野川女子学園中学高等学校
福島県立安積高等学校	渋谷教育学園幕張中学校・高等学校	東京女学館中学校・高等学校
福島県立磐城高等学校	昭和学院中学校高等学校	豊島学院高等学校
福島県立郡山高等学校	昭和学院秀英高等学校	成城高等学校
福島県立福島高等学校	芝浦工業大学柏高等学校	玉川学園
会津若松ザベリオ学園高等学校	お茶の水女子大学附属高等学校	中央大学附属高等学校
学校法人 石川高等学校	東京学芸大学附属高等学校	中央大学杉並高等学校
茨城県立 IT 未来高等学校	東京学芸大学附属国際中等教育学校	千代田中学校・高等学校
茨城県立水海道第一高等学校	東京都立上野高等学校	桐朋中学校・桐朋高等学校
茨城県立水戸第一高等学校	東京都立桜修館中等教育学校	豊島岡女子学園中学校・高等学校
茨城県立水戸第二高等学校	東京都立大泉高等学校・附属中学校	富士見中学校高等学校
茨城県立緑岡高等学校	東京都立科学技術高等学校	富士見丘中学高等学校
茨城県立竜ヶ崎第一高等学校	東京都立北園高等学校	文京学院大学女子高等学校
江戸川学園取手高等学校	東京都立国立高等学校	武蔵高等学校中学校
栃木県立栃木高等学校	東京都立小石川中等教育学校	立教池袋中学校・高等学校
作新学院高等学校	東京都立国分寺高等学校	神奈川県立有馬高等学校

特別会員 464 (その 2)

神奈川県立神奈川工業高等学校
神奈川県立相模原弥栄高等学校
神奈川県立湘南高等学校
神奈川県立多摩高等学校
神奈川県立柏陽高等学校
神奈川県立横浜翠嵐高等学校
神奈川県立横浜緑ヶ丘高等学校
横浜市立横浜サイエンスフロンティア高等学校
英理女子学院高等学校
学校法人柏木学園 柏木学園高等学校
神奈川大学附属中・高等学校
湘南白百合学園中学高等学校
フェリス女学院中学校・高等学校
新潟県立三条高等学校
新潟県立新発田高等学校
新潟県立高田高等学校
新潟県立長岡高等学校
新潟県立新潟高等学校
新潟県立新潟南高等学校
富山県立西岡高等学校
富山県立高岡南高等学校
富山県立富山高等学校
富山県立富山中部高等学校
富山県立富山北部高等学校
金沢大学人間社会学域学校教育学類附属高等学校
石川県立金沢二水高等学校
石川県立大聖寺高等学校
石川県立七尾高等学校
石川県立羽咋高等学校
福井県立武生高等学校
福井県立藤島高等学校
福井県立若狭高等学校
北杜市立甲陵高等学校
長野県伊那北高等学校
長野県上田高等学校
長野県長野高等学校
長野県野沢北高等学校
岐阜県立岐山高等学校
静岡県立磐田南高等学校
静岡県立清水東高等学校
静岡県立下田高等学校
静岡県立韭山高等学校
静岡県立榛原高等学校
静岡県立浜松南高等学校
静岡県立富士高等学校
静岡県立富士東高等学校
静岡県立三島北高等学校
静岡県立焼津中央高等学校
静岡学園中学校・高等学校
愛知県立旭丘高等学校
愛知県立豊田西高等学校
愛知県立豊橋工科高等学校
名古屋市立向陽高等学校
三重県立伊勢高等学校
三重県立津西高等学校
三重県立四日市高等学校
滋賀県立草津高等学校
滋賀県立膳所高等学校
滋賀県立虎姫高等学校
滋賀県立彦根東高等学校
京都府立洛北高等学校
京都市立西京高等学校
京都先端科学大学附属中学校高等学校
立命館高等学校

大阪教育大学附属高等学校池田校舎
大阪府立生野高等学校
大阪府立大手前高等学校
大阪府立春日丘高等学校
大阪府立天王寺高等学校
大阪府立富田林高等学校
堺市立堺高等学校
高槻高等学校
明星中学校・高等学校
神戸大学附属中等教育学校
兵庫県立明石北高等学校
兵庫県立加古川東高等学校
兵庫県立篠山鳳鳴高等学校
兵庫県立三田祥雲館高等学校
兵庫県立宝塚北高等学校
兵庫県立豊岡高等学校
兵庫県立姫路西高等学校
兵庫県立兵庫高等学校
兵庫県立御影高等学校
西宮市立西宮高等学校
甲南女子中学校・高等学校
灘高等学校
雲雀丘学園中・高等学校
奈良県立畝傍高等学校
帝塚山高等学校
和歌山県立向陽高等学校
智辯学園和歌山高等学校
鳥取県立鳥取西高等学校
鳥取県立鳥取東高等学校
鳥取県立米子東高等学校
青翔開智高等学校
島根県立松江南高等学校
岡山県立岡山朝日高等学校
岡山県立岡山一宮高等学校
岡山県立岡山操山高等学校
岡山県立倉敷天城高等学校
岡山県立倉敷中央高等学校
岡山県立玉島高等学校
岡山県立津山高等学校
ノートルダム清心学園清心中学校・
清心女子高等学校
広島大学附属高等学校
広島大学附属福山中・高等学校
如水館高等学校
山口県立下関西高等学校
山口県立徳山高等学校
徳島県立つるぎ高等学校
徳島県立徳島科学技術高等学校
徳島県立富岡西高等学校
徳島県立脇町高等学校
徳島市立高等学校
香川県立観音寺第一高等学校
愛媛県立内子高等学校
愛媛県立松山南高等学校
愛媛県立三島高等学校
愛媛県立八幡浜高等学校
愛光高等学校
福岡県立嘉穂東高等学校
福岡県立小倉高等学校
福岡県立八幡高等学校
学校法人 冲学園
久留米大学附設中学校・高等学校
福岡雙葉中学校・高等学校
佐賀県立佐賀西高等学校

佐賀県立白石高等学校
長崎県立大村高等学校
長崎県立長崎東中学校・高等学校
長崎県立長崎南高等学校
熊本県立阿蘇中央高等学校
熊本県立天草高等学校
熊本県立牛深高等学校
熊本県立宇土中学校・宇土高等学校
熊本県立鹿本高等学校
熊本県立熊本高等学校
熊本県立熊本北高等学校
熊本県立甲佐高等学校
熊本県立第二高等学校
熊本県立水俣高等学校
熊本県立八代高等学校
熊本県立八代工業高等学校
学校法人文徳学園 文徳高等学校
大分県立安心院高等学校
大分県立大分上野丘高等学校
大分県立大分商業高等学校
大分県立大分西高等学校
大分県立大分東高等学校
大分県立大分豊府高等学校
大分県立海洋科学高等学校
大分県立国東高等学校
大分県立情報科学高等学校
大分県立爽風館高等学校
大分県立高田高等学校
大分県立竹田高等学校
大分県立津久見高等学校
大分県立中津北高等学校
大分県立日出総合高等学校
大分県立日田三隈高等学校
大分県立別府翔青高等学校
大分県立別府鶴見丘高等学校
大分県立由布高等学校
学校法人 大分高等学校
宮崎県立五ヶ瀬中等教育学校
宮崎県立高鍋農業高等学校
宮崎県立宮崎大宮高等学校
鹿児島県立鹿児島中央高等学校
鹿児島県立甲南高等学校
鹿児島県立種子島中央高等学校
鹿児島県立福山高等学校
沖縄県立球陽高等学校
【高等専門学校】(11)
旭川工業高等専門学校
八戸工業高等専門学校
富山高等専門学校
国際高等専門学校
大阪公立大学工業高等専門学校
和歌山工業高等専門学校
松江工業高等専門学校
香川高等専門学校
熊本高等専門学校
都城工業高等専門学校
鹿児島工業高等専門学校
【大学】(77)
国立大学法人 北海道大学
北海道科学大学
国立大学法人 弘前大学
八戸工業大学
国立大学法人 岩手大学
国立大学法人 東北大学

特別会員 464 (その 3)

東北工業大学
国立大学法人 秋田大学
公立大学法人 秋田県立大学
東北芸術工科大学
国立大学法人 福島大学
公立大学法人 会津大学
国立大学法人 筑波大学
国立大学法人 群馬大学
群馬県立女子大学
国立大学法人 埼玉大学
国立大学法人 お茶の水女子大学
国立大学法人 東京科学大学
国立大学法人 東京学芸大学
国立大学法人 東京藝術大学
国立大学法人 東京大学
東京都立産業技術大学院大学
学校法人 慶應義塾
駒澤大学
上智大学
玉川大学
学校法人 帝京大学
東京都市大学
二松学舎大学
学校法人 早稲田大学
国立大学法人 横浜国立大学
東海大学
国立大学法人 長岡技術科学大学
国立大学法人 新潟大学
公立大学法人 長岡造形大学
国立大学法人 富山大学
公立大学法人 富山県立大学
国立大学法人 金沢大学
国立大学法人 福井大学
公立大学法人 都留文科大学
国立大学法人 信州大学
国立大学法人 静岡大学
東海国立大学機構
国立大学法人 豊橋技術科学大学
国立大学法人 名古屋工業大学
愛知大学
中部大学
国立大学法人 三重大学
国立大学法人 滋賀大学
聖泉大学
立命館大学
龍谷大学
国立大学法人 大阪大学
国立大学法人 大阪教育大学
公立大学法人大阪 大阪公立大学
国立大学法人 神戸大学
関西学院大学
国立大学法人 奈良国立大学機構
奈良女子大学
公立大学法人 奈良県立大学
国立大学法人 和歌山大学
国立大学法人 岡山大学
公立大学法人 岡山県立大学
岡山理科大学
国立大学法人 広島大学
国立大学法人 山口大学
国立大学法人 香川大学
国立大学法人 愛媛大学
高知県公立大学法人 高知工科大学
国立大学法人 九州大学

国立大学法人 九州工業大学
中村学園大学中村学園大学短期大学部
国立大学法人 佐賀大学
国立大学法人 長崎大学
国立大学法人 熊本大学
崇城大学
国立大学法人 大分大学
鹿児島国際大学
【専門学校】(1)
学校法人 国際文化アカデミー
【行政庁】(2)
気象庁
特許庁
【国立研究開発法人・独立行政法人】(14)
国立研究開発法人 宇宙航空研究開発機構
国立研究開発法人 海上・港湾・航空技術研究所
国立研究開発法人 海洋研究開発機構
国立研究開発法人 国際農林水産業研究センター
国立研究開発法人 産業技術総合研究所
国立研究開発法人 情報通信研究機構
国立研究開発法人 新エネルギー・
産業技術総合開発機構
国立研究開発法人 水産研究・教育機構
国立研究開発法人 日本原子力研究開発機構
国立研究開発法人 農業・食品
産業技術総合研究機構
国立研究開発法人 防災科学技術研究所
国立研究開発法人 理化学研究所
国立研究開発法人 量子科学技術研究
開発機構 (QST)
独立行政法人 国立文化財機構
【自治体・教育委員会】(45)
(うち都道府県教育委員会 37)
北海道教育委員会
岩手県教育委員会
宮城県教育委員会
秋田県教育委員会
山形県教育委員会
福島県教育委員会
茨城県教育委員会
群馬県教育委員会
埼玉県教育委員会
千葉県教育委員会
東京都教育委員会
神奈川県教育委員会
新潟県教育委員会
富山県
富山県教育委員会
石川県教育委員会
山梨県教育委員会
長野県教育委員会
静岡県教育委員会
愛知県教育委員会
京都府教育委員会
大阪府教育委員会
奈良県教育委員会
和歌山県教育委員会
鳥取県教育委員会
島根県教育委員会
岡山県教育委員会
広島県教育委員会

山口県教育委員会
愛媛県教育委員会
福岡県教育委員会
長崎県教育委員会
熊本県教育委員会
大分県教育委員会
宮崎県教育委員会
鹿児島県教育委員会
沖縄県教育委員会
仙台市教育委員会
さいたま市教育委員会
千代田区教育委員会
川崎市教育委員会
堺市教育委員会
神戸市
神戸市教育委員会
【博物館・科学館等】(33)
旭川市科学館
TDK 歴史みらい館
つくばエキスポセンター
向井千秋記念子ども科学館
所沢航空発祥記念館
日本工業大学 工業技術博物館
鴨川シーワールド
科学技術館
一般社団法人 高度技術社会推進協会
(TEPIA 先端技術館)
一般財団法人 東武博物館
株式会社 日本保育サービス
公益財団法人 目黒寄生虫館
ロマンスカーミュージアム
糸魚川フォッサマグナミュージアム
上越科学館
サイエンスヒルズこまつひととのづくり科学館
福井市自然史博物館分館
公益財団法人 岐阜かかみがはら航空宇宙博物館
ひだ宇宙科学館 カミオカラボ
静岡科学館
東海大学海洋科学博物館
ふじのくに地球環境史ミュージアム
名古屋市港防災センター
島津製作所 創業記念資料館
福知山市児童科学館
大阪科学技術館
シャープミュージアム
鳥取県立博物館
鳥取市さじアストロパーク
日本化石資料館
北九州市立自然史・歴史博物館
いのちのたび博物館
体験型子ども科学館 O-Labo
鹿児島市立科学館
【支援団体】(9)
一般財団法人 エンジニアリング協会
公益社団法人 応用物理学会
一般社団法人 情報処理学会
一般社団法人 電気学会
公益財団法人 東北活性化研究センター
日本科学技術ジャーナリスト会議
公益財団法人 日本自動車教育振興財団
公益財団法人 日本数学検定協会
一般社団法人 日本ロボット学会



一般社団法人 学びのイノベーション・プラットフォーム 事務局
〒153-8505 東京都目黒区駒場 4-6-1 東京大学生産技術研究所内
TEL:03-5452-6621 Email:info@plij.or.jp URL:<https://plij.or.jp>